

令和4年度  
静岡県立大学短期大学部

F D委員会報告

## I 令和4年度FD委員会活動について

### 令和4年度FD活動の基本方針

FD事業本来の目的に立ち返るといふ基本方針のもと、PDCAの手法を視野に入れてFD活動の全面的なチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行った。また、前年度に引き続き、コロナ禍という状況下にあった令和4年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた静岡県立大学の活動指針に沿った内容となるよう、事業計画を策定し実施した。

基本方針に従って実施した事業は以下のとおり。

- ・FD講演会
- ・授業評価アンケート
- ・FD新任研修会
- ・FD資料展示
- ・「FD活動報告書」の編集発行・公開
- ・委員会開催

以下にその詳細を報告する。

#### 1. FD講演会

- ・第1回短期大学部FD講演会

日時：令和4年5月19日（木）16：10～17：00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学副学長 今井康之氏

演題：「学部教育・研究とは何か？大学教員に求められること！！

～学部における教養教育と教員としての心がけ～

参加者：32名

本学の統合再編として新学部構想が検討される中、教養教育のあり方について、講師の経験を踏まえたわかりやすく有意義な講演であった。

- ・第2回短期大学部FD講演会

日時：令和4年7月21日（木）16：10～17：00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学副学長 富沢壽勇氏

演題：「学部教育・研究とは何か？大学教員に求められること！！

～文化人類学の視点から～

参加者：32名

講師の専門に基づいた文化人類学における文化の捉え方についての興味深い話と、教養を「鶴」に例えたわかりやすい話で構成されており、質疑応答も活発

に行われた。

・第3回短期大学部FD講演会

日時：令和4年9月15日（木）16：10～17：00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学副学長 酒井敏氏

演題：「学部教育・研究とは何か？大学教員に求められること！！  
～教養と専門～」

参加者：32名

教養はガラクタであり、理性とともに感性を豊かにすること、カオスを大切にすることの意義について楽しいエピソードを交えて話をされ、参加者も引き込まれる内容であった。

・第4回短期大学部FD講演会

日時：令和4年10月28日（木）16：10～17：00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学副学長 小林公子氏

演題：「学部教育・研究とは何か？大学教員に求められること！！  
～教員による学生支援～」

参加者：28名

県立大学の学生部長として、「学生を大切にする視点」が盛り込まれた、あたたかな人柄が伝わる内容であった。学生支援の内容以外に、技術士の資格取得についての興味深い話も聴くことができた。

・第5回短期大学部FD講演会

日時：令和4年11月17日（木）16：10～17：00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学副学長 渡邊順子氏

演題：「学部教育・研究とは何か？大学教員に求められること！！  
～学部における教養教育と教員としての心がけ～」

参加者：31名

新学部設置に向けて、大学の目的やニーズ、大学教員の役割を改めて考えることができる内容であった。FD活動について組織的に取り組む必要性がよく伝わった。

2. 授業評価アンケート

昨年度内容の見直しを行った質問項目を用いて実施した。実施方法は、本年度もコロナ禍の影響を受け遠隔授業で実施された授業もあったため、遠隔授業に関する

質問項目を残しつつ、対面方式で前期、後期それぞれ実施した。

3. FD 新任研修会

本学の教育力の維持向上を図るため、初任者1名を対象に、教育理念や教育指導等、本学の教員として身に付けておくべき基本的な知識を習得するための研修を行った。

4. FD 資料展示

小鹿図書館と共催で、FD 資料展示コーナーを設置した。近年刊行されたFD 関連書籍の中から、委員会で展示書籍を選定して3月に実施した。

5. 「FD 活動報告書」の編集発行・公開

昨年度と同様、授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成することを決定した。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートへのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

6. 委員会開催回数

4回

## II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

### 1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

#### 1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法は、新型コロナウイルス感染症による遠隔授業実施を踏まえて、遠隔授業に関する質問項目を残しつつ、対面方式で実施した。授業評価アンケートの内容は、昨年度見直しを行った内容で実施した。

実施方法は次の通りである。

- ① アンケートの実施時期は、早期終了科目は授業第8週より、15回実施科目は授業第14週より回答開始とし、回答期限を集中講義/補講/試験期間の最終日とした。
- ② 授業担当教員が授業ごと、授業終了15分前に学生にアンケート用紙を配布、説明をした。学生がアンケート用紙を回収し、封筒に入れて学生室へ提出する。
- ③ 学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄の転載を外部業者に委託する。
- ④ 業者から納品された教員個々のアンケート集計と自由記述を転載したものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配布し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
- ⑤ 上記①～④は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑥ 担当科目のうち、回答者が5名以下の場合は、集計を行わない。
- ⑦ システム上、授業科目ごとの評価となるため、担当教員2名以上で担当している科目は、履修科目一覧表の1番目に名前が記載されている教員に結果を渡す。

#### 1. 2. 授業評価アンケート用紙

昨年度見直しを行ったアンケート項目と同様に、3つの大項目を設定し、「あなた自身の取り組みについて」(7項目)、「授業について」(13項目)、「遠隔授業の方法について」(3項目)、計23の質問項目を設定した。各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの5段階によって行なわれる。自由記述欄は、「この授業でよかったと思うこと」、「この授業で改善が必要だと思うこと」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生のコメントを具体的に述べられる内容となっている。

授業評価アンケートで使用した質問項目

あなた自身について	1	自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ。
	2	自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。
	3	自分は、この授業を意欲的な態度で受講した。
	4	自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。
	5	自分は、予習復習（提出課題を除き）をして理解を深める努力をした。
	6	この授業の内容は良く理解できた。
	7	自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。
授業について	8	シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた。
	9	授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった。
	10	授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた。
	11	毎回の授業の量と範囲は適切であった。
	12	教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。
	13	教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた。（説明の仕方、授業形態、配付資料、板書、情報機器の活用など）
	14	教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた。
	15	教員から与えられた課題（宿題、レポート）は、質・量ともに適切であった。
	16	教員に授業に対する熱意が感じられた。
	17	教員は、学生に対して誠実に対応していた。（質問への対応、レポートへのコメントなど）
	18	成績評価の方法は適切であった。
	19	この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。
	20	安全についての指導や配慮が十分なされていた。（実習科目のみ回答）
No.21～23は遠隔授業が行われた科目について回答してください。		
遠隔授業について	21	遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった。
	22	遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた。
	23	遠隔授業での課題は、学生が主体的に学べるように配慮されていた。
その他の意見		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・この授業で良かったと思うこと</li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・この授業で改善が必要だと思うこと</li> </ul>		

### 1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

### 1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和4年度FD委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

## 2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

#### i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

#### ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻:一般教育等 職名:教授 氏名:林恵嗣

対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

### 【体育実技】

令和4年度も前年度に引き続き、履修者数が50名近くになる社会福祉学科社会福祉専攻ととも学科の合同授業において、対面授業と遠隔授業のグループに分けて実施した。大きく4グループに分け、4週に1度、遠隔授業となるように人数を調節して対面授業を実施した。遠隔授業の内容については、web上で見えるような資料を作成して、課題を行う形とした。歯科衛生学科と社会福祉学科介護福祉専攻は対面授業を基本とした。

概ね良い評価が得られたと考えているが、やはり対面授業が基本となったことによると考えている。令和5年度は全クラス対面授業での実施を予定している。

授業改善についてのコメントがあったので、下記の通り回答します。

コメント	回答
卓球の時間が長く、バスケが短かった。	どちらも同じ回数実施しています。
レポートの有無を先に知りたかったです。	履修要項に記載しています。また、第1回授業で説明しています。
声が聞こえにくくて、指示が分かりにくかったです。	授業時においては、学生が体育館全体に散らばっている状態であるので、向いている方向によっては聞こえにくくなったかもしれません。可能な限り全体に聞こえるような角度で指示を出すように注意します。

### 【健康科学論】

令和4年度は、対面授業として実施した。また、授業内容の復習用に Universal Passport で小テスト(参加は任意)を実施した。令和4年度は再試験対象者がかなり少なくなっており、この小テストによる復習がある程度役割を果たしたと考えている。

授業内容の難易度については、身体の健康を扱う内容であるので、理科系の科目を苦手としてしまうと難しく感じると思います。できるだけ内容をシンプルにして説明をしていますが、身体の調節機能は複雑なものでもある(複雑だからこそ面白いのですが)ので、どうしてもシンプル化できる限界はあるかと思います。分からなければ、復習をして欲しいですし、そのために復習用の小テストを準備しました。苦手であればあるほど、授業内で理解するのは難しいと思いますので、質問をする、復習する等の努力はしてほしいと思います。



学科：一般教育等 職名：講師 氏名：有元志保  
対象科目：英語（演習）

本科目は、英語運用能力の向上とともに、異文化に対する理解を深めることを目的とする。今年度は、世界の国々の歴史や文化を文章と映像で紹介する教材を使用した。

授業の到達目標として以下の項目を設定した。

- ①授業で習得した語彙や文法知識を活用して英文を読み、内容を理解できる
- ②短い映像を繰り返し視聴し、生の英語の聞き取りに慣れる
- ③学習した内容に関して、自分の意見を簡単な英語で表現できる
- ④世界の多様な文化や人々に対する関心と理解を深める

①については、辞書で語の品詞や例文を確認したり、パワーポイントの資料を補助的に使用したりすることで、わかりやすい説明に努めた。②については、発音の確認も交えながら、リスニングの練習を実施した。英語を母語としない人々へのインタビュー映像を通じて、英語の多様性についても理解を促した。③については、感染症対策を講じた上で、ペアワークやグループワークを実施し、英語で自分の意見を表現し、他者の考えを聞く機会を積極的に設けた。④については、テキストの内容に加え、インターネット上の情報も活用して、学生が関心を寄せ、発展的な理解を得られるよう工夫を行った。

毎回の授業の最後には、コメントシートと小テストによって理解度を確認した。それらの内容や、定期的に実施したテスト、授業評価アンケートの結果等からは、上記の目標が概ね達成できたと判断できる。今後も学生の主体的、積極的な学習を促しつつ、効果的な授業運営を目指したい。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:上田一紀

対象科目:情報処理演習(演習)、情報の活用(演習)、情報と生活(講義)、現代社会学(講義)

#### [情報処理演習] (演習)

本科目の到達目標は、PCの基本操作、PCを用いた文書作成、データ処理(表計算、グラフ作成)、インターネットの利用、プレゼンテーション資料の作成を行えるようになること、である。

#### [情報の活用] (演習)

本科目の到達目標は、クラウドコンピューティングシステムをPCとスマートフォン(複数端末)で活用できるようになること、情報の活用(情報の収集、編集、発信)に関する技法を習得し、コミュニケーションツールとして使用できるようになること、である。

⇒ 両科目ともにオンデマンド型(講義動画の視聴+各自の情報機器の操作)で実施した。「動画がわかりやすかった」「できるようになったことや知ったことが多かった」「繰り返し動画を視聴できる点がよかった」等のプラスの評価を多く得ることができている。

⇒ 両科目ともに、昨年度のアンケートでは、対面で実施してほしいという意見があった。そのため、2022年度は(Covid-19の感染状況をみつつ)感染対策を十分に講じた上で、希望者には対面形式で授業を実施した。この点に関して、「オンデマンド、対面のどちらでも受講できるので、良かった」という回答が得られた。

#### [情報と生活] (講義) (※履修者が5名以下のためアンケート未実施)

本科目は、情報機器(PCやスマートフォン)やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法(情報法、メディア法)の基本を理解すること、を目的としている。

#### [現代社会学] (講義)

本科目は、社会学的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会学的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになること、を目的としている。

⇒ 両科目ともにオンデマンド型で実施した。資料や動画が見やすいという回答を得ることができた。また、「教員の顔出しを希望」という意見もあり、2023年度は対面で授業を実施予定である。内容に関しても受講生にとってより身近なトピックを扱い、興味・関心を持てるように修正していく予定である。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:高田佳輔

対象科目:社会調査の基礎(講義)

対象科目の授業評価アンケートの集計結果については、次の通りである。

まず「あなた自身について」、「授業について」、「遠隔授業について」において、平均点は相対的に見れば学科・専攻平均点を下回ったが、数値自体は絶対的には大きな問題はなかったと思われる。本科目は、学生の大半が初めて学ぶ内容であり、毎回必ず課題を課す形式を採用しているため、難易度の点や課題の量の点で数値が低くなったが、それほど数値は低くなることはなかった。この背景には、本科目において、ゲーミフィケーションの仕組みを取り入れた結果であると思考する。ゲーミフィケーションとは、「目的が明解」であり、「課題を行なったら必ず評価が得られる」ことや、「ユーザー(学生)間で交流(教え合い・相談)が可能」などの特徴を持つことで、ユーザーが楽しみながらモチベーションを維持しつつ目標に向かって進むことができるゲームのような仕組みのことを指す。まず、対象科目では、毎回の授業の冒頭で必ず「今回のゴール」を提示するようにしている。これにより学生は、自身が当該回の授業の重要なポイントをきちんと理解できているかを確認できるようになっている。次いで、対象科目では、課題を出したら、必ず次回の授業冒頭で評価を行うこととしている。この評価(褒める)システムを採用することによって、学生からは「ほめられると自己肯定感が上がる(中略)もっとほめて」という意見が得られた。さらに、対象科目における工夫としては、授業内で1つの分析手法について紹介を行った際は、その直後にその分析手法を実際に学生が実践できるように授業を展開している。これにより、学生は知識と技能をすぐさま結びつけられるようになっていると考える。

上述の通り、対象科目は、学生の大半が初めて学ぶ内容であり、授業内容の理解や、PCスキルの必要性など複数の能力が求められる比較的難しい授業内容となっている。文章作成ソフトや表計算ソフトなどをほとんど使用したことのない学生も多く、そのスキルの修得も求められたため、上述の結果となったとも考えられる。同一の学生から、「毎回課題が難しかった」というコメントがあった一方で、「今まで触れてこなかった分野なので面白く感じました」とのコメントが得られた。この点から、授業内容は難しくはあるが、やりがいのある授業が展開できたのではないかと考える。今後については、単に授業の難易度を下げるのではなく、授業内容はそのまま、学生が難しいと感じるポイントについて、説明をいっそう丁寧に行うなどの工夫をすることで、総合的な理解につなげたいと考える。

以上を要約すると、筆者が担当する科目においては、ゲームのように楽しく、目的が明解で、課題を達成したらすぐさまフィードバックが得られ、他者とも協力できるような授業形態をとることで、学生が楽しみながら学べる授業を展開してきた。今回の授業評価において、授業の形態については概ね良好な反応が得られた一方で、最終課題や授業内容については内容が難しすぎるという指摘も一部あったため、今後は、学生が難しいと感じた箇所の説明をいっそう丁寧にすることや課題の取り組み方の例をさらに詳細に提示することによって、学生がストレスなく授業に取り組めるように工夫を行いたいと考える。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：①臨床歯科医学序論（講義）、②小児歯科学（講義）、③口腔衛生学I（講義）、④口腔衛生学II（講義）、⑤口腔発達学（講義）、⑥臨床歯科診査法（講義）、⑦救急処置法（講義・教員2名で分担）⑧臨地実習（実習・学科全教員で分担）

## I 授業の目標・工夫

2022年度はCOVID-19感染拡大のため引き続き困難な教育環境であったが、意欲的にAdvanceな内容を盛り込むための挑戦を続けた。上記の授業科目に関しては、さらなる学修効果を追求し、感染拡大状況に配慮してハイフレックス型授業、オンデマンド型授業を柔軟に盛り込みながら可能な限り対面授業を実施した。医療系大学間共用試験実施評価機構委員の協力を得て上記⑥の中で模擬患者参加型アクティブ・ラーニングを対面で実施し先端的な医療面接および動機づけ面接法の学修機会を実現化した。

上記⑧臨地実習について言及したい。教育改革として昨年度導入した歯科衛生ケアプロセスの段階的学修方略を引き続き実施した。1年間を通して少人数制ゼミ形式でシミュレーションから実践へ移行する教育方略は学修効果が高いと実感する。その集大成として歯科衛生実践実習報告会が当初授業計画に組み込まれていた。ところが、正当な理由も十分な説明もないまま科目責任者と称する学科教員によって直前に中止を強いられ、教員ならびに学生にも大変な混乱が生じた。計画どおりの実施を求める学生達の声に応え、質の高い歯科衛生教育の遂行に責務を果たすべく、同志教員達と共に合同ゼミとして発表会を開催し、失われそうになった学修機会を死守した。ただ、履修登録者全員ではなく約半数の学生しか学びを担保してあげられなかったことについては十分と言えず、力が及ばず無力さを実感した。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果によると、「I あなた自身（5点満点）」は①4.52, ②4.48, ③4.56, ④4.48, ⑤4.60, ⑥4.35, 「II 授業（5点満点）」は①4.91, ②4.77, ③4.57, ④4.73, ⑤4.84 ⑥4.47, 「III 遠隔授業（5点満点）」は①5.00, ②5.00, ③4.82, ④4.72, ⑤4.67, ⑥—であった。これらの評価はまずまずの結果だが、満足してはならない。そもそも遠隔授業を実施していない科目について「III 遠隔授業」に点数が付いている事により、この授業アンケートの信頼性と妥当性に甚だ疑問が残る。

自主的な予習を支援するために、すべての担当科目において各講義回の2週間前までに該当する配布資料を学務システム（UNIVERSAL PASSPORT）にアップロードした。さらに同システムから小テスト形式の課題を作成し、ICTを活用していつでもどこでも復習できる環境を整えた。今後はさらに双方向性を組み込んだ様式を検討する予定である。

『無理に売るな。客の好むものも売るな。客のためになるものを売れ。』これは松下幸之助の名言の一つである。私は常々、これは教育に当てはまる言葉だと考えてきた。『学生を喜ばせる教育をするのではない。学生のためになる教育をするのだ。』と。本学の授業アンケートが、教育が学

生のためになっているか否かを評価できる尺度であれば，実施する意義はあると思う．

### III 学生に期待すること・学生への要望等

大学は，専門知識や技術だけを学ぶ場所ではなく，自らの意思で生きる力を養う修練場である．本当に重要なことは教科書（書籍）に載っていない．現場の患者（対象者）こそ最上の教科書である．現場での知識の使い方，判断に至る思考過程，正解のない問題への立ち向かい方，失敗からの立ち上がり方・活かし方等を真の実務経験者から学んでほしい．

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:野口有紀

対象科目:歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、地域歯科保健実習(実習)

### I 授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を作成した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう授業内でマークシート形式のプレテストとポストテストを行った。プレテストおよびポストテストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用いた。
- ・ 事前学習として必要な部分を自ら判断し、事前学習するように促し、修得した基礎科目の知識の見直しを課した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、机間指導を行い質問しやすい環境を設定するとともに、オフィスアワーを設定し丁寧な対応を心掛けた。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験のみに偏向しない多面的成績評価をした。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケート集計結果の「I あなた自身の取り組みについて」「II 授業について」のすべての項目において、学科平均点より高い傾向がみられた。「II 授業について」では4.72~4.89であり、特に「授業の難易度は適切であった」「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」「理解が深まるように授業方法を工夫していた」「授業に対する熱意が感じられた」「学生に対して誠実に対応していた」では非常に高い平均点であった。工夫した授業運営により、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高める工夫として、ディスカッション、バズグループ、グループワークの設定やビデオドラマ鑑賞後の話し合いなど効果的な取り組みを行い改善・工夫に努めたい。

### III 学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにしてほしい。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:吉田直樹

対象科目:生化学(講義)、口腔生理学(演習)、口腔微生物学(講義)、微生物学(講義)、歯周治療学(講義)、歯科衛生統計学(講義)

## I 授業の目標及び授業において工夫していること

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験

資格」を取得する。担当科目においては、国家試験に直結するものが多いため、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、ひとつの大きな目標としている。理解しやすくするためには、要点を示して簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後も永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるし、否定されることすらあり得るのだということ、理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC (Over Head Camera) を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。

また、90分授業においては、前半と後半に分け、授業の中頃に、質問を受け付ける時間帯を設け、講義室内を巡回することによって、学生が疑問点を解決しやすいようにしている。このことによっても、集中力の低下を防げるのではないかと考えている。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、概ね良好であったと考えている。

今後の改善としては、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思うような授業を行いたい。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するという事にたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考えている。

### Ⅲ 学生に期待すること

多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「辛い所に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。理想的には、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいと考える。学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けるなかで、自分自身で能動的にノートをとれる能力を身に着けることを希望する。

近年、本学に限ったことではないが、様々な状況において、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされているのではないかと、危惧している。マニュアルが無いとうまくできない部類の人を生み出す、手助けをしてしまっているのではないかと感じることもある。

学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないうではいけない。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。社会人になってからは、そのような能力は必須であろう。

学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちが生まれることを希望している。そして、それを持ち続けることを希望している。



学科・専攻:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:長谷由紀子

対象科目:臨地実習基礎(実習)、学校歯科保健論(講義)、マネジメント論(講義)、学校歯科保健実習(実習)(講義)

#### 【授業の工夫】

学校歯科保健論では、知識を修得する講義だけではなく、活用できる知識となるよう歯科保健指導計画についてグループワークやプレゼンテーションなどを実施した。マネジメント論では、講義と事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進め、論理的な歯科衛生実践の考え方のトレーニングとなるよう、学生の学習状況を確認したうえで必要なフィードバックをし、積極的な参加を促すように工夫して実施した。臨床現場での歯科衛生実践の根拠を念頭におき、歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・実習を行った。学校歯科保健実習では、これまでに学んだことを活用し、対象者に合わせた歯科保健行動に関する「ねらい」を達成するための指導方法を学生が主体的に立案し、実践するための学習支援を行うよう心掛けた。臨地実習基礎は、初年次の実習科目であるため、歯科衛生士となるものとしての意欲や態度を涵養できるよう、大学内の学習内容と臨床現場を結び付けられるような説明と授業内容を展開した。どの科目においても、各学生の学習状況(成果)の把握とフィードバックを行い、個人に合わせた指導が行えるように努めた。

#### 【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回、自由記述でいただいた感想から、学生一人一人の学習状況の把握とそれに応じた形式的なフィードバックは引き続き実践していきたいと感じた。今後は、提出された課題や学習ファイルからだけでなく、授業中にもなるべく個々の学生の学習状況を確認、把握し、その場で適切なフィードバックが可能な限りできるよう努めていきたい。複数の教員で実施した実習科目については、協力してくださった教員の実務経験からの指導やフィードバックにより、学生の理解や興味・関心を引き出すことができた。学生は、教科書に載っている知識だけでなく、実際の臨床現場でどのように応用され活用されているのかにとっても関心を持っているため、今年度協力していただいたような実務経験のある教員が実習科目を担当することが学生の教育に深い意義があると考え、今後も実際の実務経験を有する教員と協力して実習科目を運営していきたいと思う。授業内容の難易度については、基本的なことではあるが伝える能力と状況に応じた指導方法を研鑽していくべきである。授業課題の量や期間については、多すぎても少なすぎても学生の能力が向上につながらないため、随時学生の様子や状況を理解し、なぜこの学習が必要なのかを学生に理解してもらえるように説明するなど、適切な量、質の学習支援が行えるよう尽力していきたい。

#### 【学生に期待すること】

皆さんの学習状況を把握し、適切な教育を行うためにも授業中において、積極的な質問や率直なご意見をお願いします。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:松原ちあき

対象科目:高齢者歯科学(講義)、障害者歯科学(講義)、障害者歯科保健介護論(講義)、障害者歯科保健介護実習(講義・演習)、口腔介護予防・リハビリテーション法(講義・演習)

### 1. 授業の工夫

上記すべての講義において、「高齢者・障害者に対する口腔健康管理に必要な知識を得る」といった内容を目的として講義・演習を実施した。

講義内では、基礎的な疾患や法律に関する知識を実際の臨床での事例や症例を提示しながら、定着を図った。症例では、実際に実施しうる口腔機能管理を検討する課題を与え、アクティブ・ラーニングを促した。

演習では、口腔健康管理の中で口腔衛生管理および口腔機能管理に分け、使用する器具や検査機器、口腔衛生管理用品について、実際に体験また相互に演習を行い、技術修得を計った。また介護・福祉やその他専門領域に優れた教員や専門家と連携し、講義・演習を実施することで、スペシャルニーズのある者に対する支援のあり方について幅広く知識を得る機会を作った。

また、高齢者・障害者の分野では専門的な研究が日々アップデートされているため、専門の講師を招致し、臨床のイメージや最先端の研究に関する情報を得るための機会を作った。

### 2. 授業についての自己評価と今後の課題・工夫

授業アンケート集計結果から、実際の現場での様子を踏まえた講義展開について評価を得た。自らの臨床経験上の知識や技術についてを提示しながら講義を展開しているが、今後日々アップデートする高齢者・障害者歯科分野の臨床現場の状況やエビデンスに基づく情報発信を行えるよう、常に臨床・研究業務への研鑽も積んでいきたい。

昨年度同様に「成績評価の方法」については、他の質問項目に比べ、標準偏差が大きかった。全ての学生で試験への到達度が高く、知識の定着度に成績の差があまり大きくなかったことが要因と考えられる。学生全員が平等に評価されるよう、より知識の定着や発展的な思考が身についているかを評価するため、試験問題に記述試験を盛り込むことを検討したい。それにより授業で得た知識をどのように処理し、どのように課題を解決するかというプロセスも含め評価することが可能となる。

### 3. 学生に期待すること・学生への要望等

授業内で分かりにくい点や改善点等に関する意見をいただきたい。また、高齢者、障害者といった専門分野に特化した科目のため、さらに深く知りたい点など、自らの興味に合わせた意見があると嬉しい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:森野智子

対象科目:歯科保健指導論(講義)、歯科衛生倫理(講義)、コミュニケーション演習(演習)

### I 授業の工夫

これまで通り「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、それを行動に繋げる」教育実現を目指して、思考機会を多く設け、自ら資料を読む(もうとする)力の定着を目指しています。また、常に、実務経験に基づく具体的根拠が明確な説明を心掛け、身体や心を動かす機会が増えるよう意識した構成で授業展開しました。

一方、学生の参加評価が低い傾向がある、「自分(学生)は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」については、引き続き、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにして質問の機会を増やす努力をしています。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」の総合評価は 4.51 と 4.62 であり、自由記述には多くのポジティブコメントが記載されていました。ですが、1名(2.7%)学生が、質問項目「この授業は新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。」で、「評価2. あまりそう思わない」を選んでいました。このことから、初回授業時に倫理的配慮とコミュニケーション能力を持つことが医療人として必須事項であることを説明し、十分な理解を得ることが大切だと感じました。

また、今年度から始まった新カリキュラム科目「歯科保健指導論」の総合評価は 4.71 と高い一方で、質問項目「教員から与えられた課題(宿題・レポート)は、質・量ともに適切であった。」は約 2 割の学生が「3. どちらとも言えない。」1 割強の学生が「2. あまりそう思わない」「1. そう思わない」と回答していました。質問からは、課題量が多いのか少ないのかを読み取ることが出来ないものの、仮に全体の 3 割強の学生が、課題を多い(過ぎる)と感じたとしたら、適切(やや適切を含む)だと感じた 7 割弱の学生との間に、大きな学習意欲レベル差があることとなります。自ら考えて学ぶ意欲を持つ学修姿勢を育てるために、丁寧かつ根気強く説明する必要があると考えています。学生の皆さんも課題を楽に済ませることではなく、プロフェッショナルとしての実力をつける目的で授業を受けたり課題に取り組んでください。

### III 学生に期待すること・学生への要望

歯科衛生士は地域の人々の生活(の質)をあらゆる方向からサポートできる素晴らしい職能です。1 年次に机上で学んだ知識を、2 年次の演習(実習)で応用して、将来歯科衛生士として社会で活動する準備を進めています。歯科衛生士としての役割を実現するために必要な知識は、日々拡大し学ぶ範囲も広がるばかりで、学生の皆さんは大変だと思います。そこで、少しでも学ぶことが楽しいと感じられるような授業や実習を提供するように努めています。社会人になる前に、大学で学ぶ意味や意義を考えて、能動的に授業に参加してくださるようお願いいたします。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:山本智美

対象科目:歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲蝕予防処置実習(実習)

## I 授業についての自己評価

令和4年度入学生から新カリキュラムとなり、「歯科予防処置論」の時間数は30時間から15時間へ減少した。本授業の目的は歯や口腔の疾病を予防し口腔機能を維持・向上するために、各種データを用いて人々の口腔保健の現状を理解した上で、う蝕や歯周病等の原因・予防方法に関する知識を修得することとした。

毎回、教科書の該当ページを明示し予習することや事前学習課題により主体的な学習を促した上で授業を進めたが、結果、授業の質と量、学生の理解度への配慮についての平均点が他の項目よりやや低かった(4.13, 4.15)。しかし、全体的には概ね良好なアンケート結果となり、授業を通じ情報収集の必要性、歯や口腔の疾病予防にはプロフェッショナルケアとセルフケアの両方が必要であることを理解し、学んだ知識を自身の口腔保健行動に繋げることができたのではないかと思われる。

「感染予防法」では新型コロナウイルス感染症の影響もあり、日ごろから感染予防に努めるとともに、歯科医療における感染予防対策の重要性を認識し、授業評価項目はどの項目もほぼ4(そう思う、ややそう思う)以上であった。

手指衛生、個人防護具の装着については体験により、滅菌、消毒、洗浄については実習室の器材等を目で見て触れたことにより理解を深めることができたと思われる。また、新カリキュラム「臨地実習基礎」において、早期臨地実習として歯科医院見学実習を年度末に実施した。学生は歯科衛生士の行う予防処置、保健指導、感染予防対策を現地で見学し、学んだ知識がどのように応用されているか理解することができたと思われる。

学内での学習と臨地での学習が融合し、学生の学びをより深めることができ、改めて講義、演習、実習へと発展させていくことの重要性を実感した。

「齲蝕予防処置実習」については、講義と実習を組合せ、講義で理論や手技、ポイントを整理した後、感染予防対策を十分行い実習を実施した。講義を欠席する学生はほとんどなく、実習に対しても意欲的に参加し、順調に実施することができた。

齲蝕予防処置の対象は小児であることが多いため、相互実習において小児への声かけ、対応を体験しながら、対象者(小児)への対応を意識した実習を実施した。

学生の考察レポートから講義で学んだことを実際に体験したことにより目的や方法、注意事項への理解が深められたようであった。

振り返りシート、レポート(課題)については、次回の授業に生かせるよう一人ひとりに丁寧なコメントを心がけことは、学生の意欲向上につながったと思われる。

## II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

3科目とも学生のほとんどが「授業の内容はよく理解できた」(そう思う、ややそう思う)

と回答しており、授業の目的は概ね達成できたと思われる。予習済であることを前提とし、レジュメの形式を変更してみたが、何をどこに書いたらよいかわからない、スピードが速い等のコメントが一部みられた。今後、講義スライド、レジュメ等教材を見直し、授業の質向上を図るとともに、学生には授業時間以外の自主的な学習に期待したい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:鈴木桂子  
対象科目:歯科衛生士業務記録法(講義)

この科目での授業評価アンケートをいただくのは、4回目になりますが、歯科衛生士業務記録法は新カリキュラム移行にあたり、2022年度後期で終了します。

8回の講義科目の中で、「歯科衛生士の業務記録の作成」を学ぶというものではありませんでしたが、架空の患者情報から問題点を読み取り、分析、介入方法を考えることにも触れ、最終的に記録に残す練習に取り組みました。授業の中では話し合いながら進めることも可といたしましたので、学生さんは自分の考えをお互いに出しあうという討論の手法もわずかではあるものの学べたのではないかと考えています。

「Ⅱ 授業について」では、当科目平均点は4.87と学科・専攻平均点と比較すると高い評価を得ていました。

科目別自由記述では、特にこの授業に対する意見や感想でネガティブなものはなく、資料の評価が高かったように思います。

次年度からはこの科目は無くなるわけですが、こちらの評価でいただいた意見をもとに他の科目での事業展開に充てたいと考えています。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:鈴木桂子  
対象科目:歯科診療補助論(講義)

この科目での授業評価アンケートをいただくのは、4回目になります。

学科・専攻平均点と比較すると全体の評価は高い方だと思いますが、「Ⅰあなた自身について」の回答では予習復讐をして理解を深める努力をしたという項目は、4.61 とやや低い傾向にありました。

この点に関しては、今後に向けて課題の検討など改善していく必要があるかと考えています。

また、「Ⅱ授業について」の当科目平均点は4.89 となり、特に低いところはありませんでした。

全8回の講義科目ですので、座学中心ではありますが、器具の受け渡しの講義の中で、患者の絵を机に貼り付け、術者、補助者役でペアとなって器具の受け渡しの練習を行なうといった動きのある内容を入れています。

1年生後期の科目ですので、臨床基礎実習室での実習も始まってはおらず、「器具を受け渡す」といった行為が全くはじめての経験だと思いますが、「楽しかった」とか「ためになった」との意見が複数ありました。学習効果を高めつつ、かつ飽きないような工夫にこれからも努めて参りたいと思っています。

#### 【授業に臨むにあたり、期待する事】

授業の基本は教科書です。授業展開も教科書を基本に行って参ります。3年生になって臨地実習に赴く場合においても、わからないこと、疑問に思ったことは、第一歩は教科書に戻り調べるということを怠らず学んでいていただきたいと思います。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 助教 氏名: 中村和美

対象科目: 歯科材料学実習(実習)、歯科診療補助・支援実習Ⅱ(実習)

## I 授業の工夫

「歯科材料学実習(1年後期)」は、前期講義「歯科材料学」で学修した知識を前提に、実際に各種歯科材料に触れ、その性状を観察し理解を深めて、基本的な操作方法や安全に取り扱うための知識・技術を修得することを目的とした。ただ、歯科材料の取り扱いができればよいわけではなく、取り扱う際に必要な患者への声かけや配慮、注意事項の伝え方等、2年次「歯科診療補助・支援実習」に繋がるよう、患者が歯科衛生士に求めることも考えさせた。

「歯科診療補助・支援実習Ⅱ(2年後期)」は、歯科臨床現場において、使用する歯科器材の準備とそれらの基本的取り扱い方法、歯科診療における患者への配慮・患者支援を修得することを授業の目的とした。「歯科材料学実習」で修得した各種歯科材料の知識や技術をもとに、実際、臨床現場の診療場面において、どのような処置で歯科衛生士がどのように診療の補助や患者支援を行うのか、実際に歯科衛生士役・術者役・患者役をローテーションして、それぞれの目線に立つことで歯科衛生士として効率よく、なおかつ患者の安全を第一に考えて実践する実習を展開した。

各実習において、各回実習打合せの段階では、歯科衛生士教員間で実習内容や学生指導について詳細に意思統一を図るようにした。示説では、少人数の学生を集合させて実施する方法以外にも、カメラを導入し、手元の細かな操作をズームして、学生がモニター画面を通して詳細部分を観て確認できるようにした結果、効果的に示説を実施できたと考える。

実習記録には、毎回の行動目標を自己評価する欄(4段階)や手技のセルフチェック欄を設けて、うまくできなかった内容を克服するためにはどのようにすべきかを学生が考察し易いようにした。学生の自己評価は概ね高い傾向だったが、その日の実習を振り返り、課題を明確にすることは次へ繋ぐ一助となったのではないかと考える。また、教員側からは学生の弱点を把握するツールとすることで、次の学生指導に有効活用できた。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫、学生に期待すること

「歯科材料学実習」の授業評価アンケート集計結果より、授業時間を超過してしまった回について、新たに導入した実習項目だったことから、内容を詰め込み過ぎてしまったことが要因と考える。講義、示説、実習ローテーション、片付けまで一連の流れに時間的余裕を持たせた見直しが必要である。

「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の授業評価アンケート集計結果より、「教員から与えられた課題(宿題、レポート)は質・量ともに適切であった」が4.28と低かった。実習前には、次の実習内容の概要を予習することが非常に有効である。毎回、教本の該当ページを提示して、丸写しするのではなく重要事項を簡潔にまとめることを予習として伝えていたが、教本を写すだけの予習はいらないと捉えていた学生がいたことは残念に思う。学生が予習に意欲的に取り組めるような課題の出し方を検討していきたい。



「歯科材料学実習」と「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」で学修した知識・技術を3年次の「臨地実習」で応用できるように、学内実習で修得した基礎力は、その場限りで終わらせることなく、その先へ繋げる努力を持続してほしい。そのためにも、実習後には実習記録を記載して実習内容を振り返り、自身の到達度を確認して、うまくできなかった課題を明確にして改善策を考えることを習慣化してほしい。

学科・専攻:短期大学部・歯科衛生学科 職名:助教 氏名:藤田美枝子  
対象科目:歯周疾患予防処置論(講義)、歯周疾患予防処置実習Ⅱ(実習)

### 1. 授業の工夫

対象科目となる 2 科目は、歯科衛生士の主要業務である歯科予防処置のうち、歯周疾患予防に関する科目である。講義では歯周疾患予防に関する理論とその方法について理解すること、実習科目では手技・技能を修得することを目的としている。

- ・ 授業開始時に前回の授業内容に関するミニテストの実施及び解説を行い、事後学習の促しと、知識の定着を図った。
- ・ 講義科目では授業終了時にコメントシートを記載してもらい、学生の授業内容に関する疑問点等を把握し、補足説明を行うなど、疑問点が残らないように工夫した。実習科目では、振り返りシートを活用し、実習に臨む前に自ら目標を立て、終了後に振り返りを行うことで、能動的な授業参加を促した。
- ・ 実習科目の成績評価の工夫として、筆記試験だけでなく、実技試験を実施し、技能の定着についても評価を行った。
- ・ 実技試験では、ルーブリックを作成・活用し、評価の客観性、公平性に配慮し、学生へのフィードバックを行った。
- ・ 動画教材を活用したり、器材に触れたりすることが可能な場合には実際に器材の操作体験を取り入れ、学生の理解が深まるよう、工夫した。

### 2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業評価アンケート集計結果より、Ⅰあなた自身の取り組みについて、Ⅱ授業について、両科目とも概ね良好であった。アンケートの自由記述には、特にミニテストにより知識の定着につながったといった記載が多かった。上記の授業の工夫により、理解が深まったと思われる。

今後の改善点として、2 科目とも「自分は授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目が、他の項目と比較して低かった。シラバスを読むよう促したり、実習科目であっても、事前・事後学習の継続を促したり、質問をしやすくしたりする工夫が必要であると感じた。

### 3. 学生に期待すること・学生への要望等

講義では、毎回新しく覚えることが多いですが、ミニテストなどで復習し、知識を定着させながら進めていきましょう。他科目ともオーバーラップする内容がありますが、歯周病予防の観点から考えることで学びを深めていけると良いと思います。実習では、まず器具の把持方法、固定など、基本的な操作方法を身につけましょう。実技試験を受けるのが初めてで緊張する人も多いと思います。実技試験では、「自分ができていないところ」にばかり着目しがちですが、「自分ができるようになったこと」を認める機会にしてもらえると良いと思います。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:江原勝幸  
対象科目:社会福祉原論Ⅱ(講義)

## I 授業の目標・工夫など

この科目は、専攻学生の卒業必修科目であり、前期「社会福祉Ⅰ」で学んだ社会福祉の原理・原則、歴史、制度など基礎構造を理解した上で、身近な現代社会の問題から広義の福祉の視点で問題の本質を理解し、必要な支援を考える発展的な内容としている。授業目的は 1) 社会問題と社会構造の関係の視点から、現代社会と福祉支援について理解する、2) 福祉政策の概念や理念について理解する、3) 福祉対象者のニーズに応じた福祉政策の構成要素・過程について理解する、4) 福祉政策の動向と実施課題について理解する、5) 福祉サービスの供給と利用の過程について理解するとし、その到達目標は、「自分自身の生活から社会福祉について考え、自分の言葉で社会福祉とは何かを述べる事が出来る」及び「新聞記事・報道番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、広義の福祉の視点から現代の社会問題と福祉政策の現状と課題を考察することができる」としている。

令和4年度は全15コマ対面授業で実施した(障害当事者及び支援者のゲストスピーカーを含む)。授業は常に現代の社会問題を取り上げるため、授業の目的・目標は押さえつつ、シラバスに示した授業計画通りでないアップデートなトピック(新聞記事・映像資料)を取り上げる方式をとっている。このことは授業開始時に学生に説明し理解を促しており、授業評価アンケートの自由記述「社会的な問題について深く考察しようと思った」など学生の問題意識を高めるのに役立っていると思われる。提出課題は「福祉のコトバ:人編」と「福祉のコトバ:法制度編」を出し、学生自らが調べたものを共有化できるよう簡易冊子にしている。また、これまでの授業評価において社会問題に関するビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、今年度は「自殺、過労死、保護司、保健師、発達障害、新出生前検査、視覚障害」を取り上げ、その背景・要因、現状、支援、課題など社会福祉の視点で捉え、考えをまとめさせ、個々にコメントを付けて返答した。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生評価では、「I あなた自身」で学科・専攻平均点を0.11p上回り、#7(興味・関心)、#2(出席)、#6(理解)が高く、4.0を下回ったのは#4(質問)だけであった(#4は専攻平均も低い)。「II 授業」も学科・専攻平均点0.13p高い。最も高いのが4.9の#19「新たな学び」であり、4.7の#14(主体的学び)・#15(課題)・#16(教員熱意)、4.69の#11(量と範囲)・#13(授業工夫)、4.63の#9(難易度)・#17(誠実対応)が続く。最も低いのが4.44の#8(シラバス明示)と#10(シラバス展開)という結果であった。自由記述からは「毎回の授業でビデオを見たため、わかりやすかった」「ニュースやビデオを見て、社会的問題の現状を実感することができました」と映像資料が学習に有益であることが伺える。今後、学生が質問しやすい工夫・雰囲気づくりとシラバスにおける授業展開の説明や即時性のある話題を優先することへの理解を促すことに努めたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:中澤秀一

対象科目:社会保障論Ⅰ(講義)、社会保障論Ⅱ(講義)、社会保障論(講義)、公的扶助論(講義)、公的扶助(講義)

2022年度は対面授業を基本としつつも、障害学生の合理的配慮に対応した遠隔授業も行うハイブリット授業を実施した。これまでと同様にパワーポイント資料を利用しており、授業の内容自体を大きく変えることはなかった。授業形態としては、Zoomによるライブ配信式のハイブリット授業のほか、YouTubeの限定配信によるオンデマンド型授業も実施した。このうちオンデマンド型授業は、実習期間中にも実施し、あとから補講を実施することなく、授業計画を進めることができたので、学生の負担は軽くなっている。これらの対応に対する学生の評価は、アンケートの自由記述欄によると、「**対面でも遠隔でも学びやすく、配慮があつてよかった**」とのコメントがみられた(社会福祉専攻1年「社会保障論Ⅰ」自由記述欄より)。

学生にどれだけ授業内容が定着しているかは、復習テストの実施によって測定した。アンケートの自由記述欄によると、「**復習テストがあつたので自動的に復習できてよかった**」「**確認テストで理解を深めることができること**」等が授業で良かったと思うこととして挙げられた(社会福祉専攻1年「社会保障論Ⅰ」自由記述欄より)。

その他、授業評価アンケートの結果では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」については、社会保障論Ⅰ(社会福祉専攻1年)で**4.27**(4.88)で、2021年よりも平均点が下降した(括弧内は昨年度の平均点)。どこの部分でシラバスに沿っていなかったのか検証する必要がある。また、教え方については、「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**(説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)」については、社会保障論Ⅰ(社会福祉専攻1年)で**4.47**(4.94)と、こちらも前年度と比較して平均点が下がっている。こちらも検証する必要があるだろう。いっぽう、同じ項目で公的扶助論(社会福祉専攻2年)では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**」ともに**4.79**と高い評価を得ている。学年によってのこの差は何に起因するものか、さらに検討を重ねていきたい。

「Ⅲ 遠隔授業の方法について」では、どの科目でも学科・専攻平均点を上回っていた。今後も学生の目線に立ち、誰ひとり取り残さないような授業展開をめざしていきたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ 障害児保育 子育て支援 ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習 学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

## I. 授業の目標・工夫など

コロナの影響で、社会福祉を学ぶための問題式は持っているものの、社会福祉を実践していくために必要な、ソーシャルスキルを獲得する経験を積み上げていくことができなかつた学生が多いのではないかと感じながら進めた1年間であった。コミュニケーション能力に自信のない学生が多く、対人援助者としてのソーシャルワークを教えるにあたり、昨年同様の注意深さが求められた。昨年の振り返りにも、「ソーシャルワークで教えるテーマが、いじめや虐待、DVや貧困など、学生自身が直面している課題を扱うこと、また、自己覚知という作業が要所に求められること等、ソーシャルワークの学びは常に自分と向き合う必要のある学びであるが、なかなかそのスタートに立つことすらできない幼さを感じた」と記述したが、このことに加え、社会福祉専攻学生数が20名以下であるため、一人の学生の様相が他の学生の学習にも影響していた。もちろん、教える内容を精査し、グループワークなどのペースを落として教えるなど工夫したが、特にソーシャルワーク演習は現実の対人援助技術を学ぶことを目的とした授業であるため、人が人と出会い、その中でパートナーシップを結び、人間関係を積み上げていく感覚の熟成が求められる。「人が人と出会い信頼の中でよりよく生きる方法を自ら獲得する」というソーシャルワークの基本命題は、コロナ禍で「他者と距離をとる」ことを強いられた3年間の中でずいぶんと難しくなったと考えている。

実習教育はコロナ前の状態に戻りつつある。しかし、ソーシャルスキルに課題のある学生にとって、知的障害者、精神障害者、認知症高齢者、社会的養護下児童、虐待児童、などさまざまな生きづらさのあるクライアントに出会うことはかなり大きなハードルがある。学習に加え個別の励ましと勇気づけを十分に行い実習に臨むと、すべての学生が大きく成長して戻ってくることも事実である。今後もさらに、教員の連携を図りながら実習教育の充実に努めたい。

## II. 授業の自己点検・自己評価

ソーシャルワーク論、ソーシャルワーク演習は、社会福祉専攻の中心的な科目である。そのため、4大と同じ水準で授業を計画しており学生によってはソーシャルワーカーに求められる専門性を学び驚く者も少なくない。しかし、自由記述に「授業はとてもしんどかったけどためになった」との感想が最後に読めることは大変うれしいことである。

毎年書くことだが、本学の学生はさまざまな生活課題を抱えながらも懸命に生きている学生が多い。私は、そのような学生の様子に首を垂れる気持ちを持ちながら真剣に向き合

うことをモットーにしている。コロナになり今まで以上に、経済的な困窮に直面する学生が増えた。学生にとって社会福祉を学ぶことは単なる知識や技術の獲得にとどまらず、自分自身のエンパワーするツールになることを期待し更に精進していきたい。

学科・専攻:社会福祉学科社会福祉専攻 職名:講師 氏名:佐々木将芳  
対象科目:障がい児保育 I (演習)、ソーシャルワーク論IV(講義)、児童福祉論(講義)

#### 講義におけるねらいと工夫

障がい児保育 I は1年生が受講する科目であり、保育やソーシャルワークの実習に臨む前に、障害についての基本的な理解や具体的な援助内容を理解することを目的としている。そして、「障害」についての基礎的知識を習得する過程で、これまで学生自身が抱いていたであろう「障害」に対するイメージを再構成することも意図している。さらに、それらの理解を基盤として、保育現場における子どもへの事例から学ぶことで、実習や就職後の実践への具体的なイメージを養えるよう行っている。

ソーシャルワーク論IVは 2 年次(後期)配当のため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対してソーシャルワークの発展的理解と価値・技術の再確認、そして実践者とし現場に向かうための心構えを持つという位置づけで講義を行っている。

児童福祉論は介護福祉専攻2年生の選択科目であり、社会福祉主事任用資格を満たすために必要な科目である。多くの学生にとっては直接児童福祉分野への関わりは少ないことも予想されるが、介護福祉士として支援する中で、家族の構成員たる子どもや家族の問題を発見する立場になり得るという意識を持てるような内容構成を行っている。

#### 講義についての自己評価と今後の改善・工夫

それぞれの講義ではできる限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるよう心がけた。特に障がい児保育は、1年生にとって障害などの言葉や専門的知識の内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。また、障害に対しての正しい理解と援助を行う上での戸惑いや不安をできるだけ軽減できよう、映像教材や事例などを用いて具体性をもった講義を心掛けた。

ソーシャルワーク論IVは、学生がこれまでに終えた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験や体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。

児童福祉論については、専攻の違いに配慮し、2年間の修学内容で触れる機会が少ない、子どもの問題について、学生自身も子ども時代を過ごした当事者として、問題意識を持てるような事例や課題を準備したが、担当初年度でもありその内容がまだ十分でない場面も感じられた。そのため、次年度以降もより適切な課題を探り、受講者にとって主体的に学べる環境の確保に努めたい。それらを踏まえ評価を振り返ると、それぞれの各科目でその意図を理解されたように感じる。学生にとって、「この分野に対する興味・関心増した」、「授業に意欲を持って受講した」などの項目が概ね「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。しかし、専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、まだ改善の余地は多分に残されていると思う。下記、「学生に期待すること」にも関連することであるが、学生が教員へ質問しやすい雰囲気はどう作るのか、講義を受講するに当たり事前・事後学習を積極的に行う動機付けを工夫する必要性を感じている。

その上で、学生自身の体験や興味に引き寄せられるような指導方法を考えていきたい

学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさは課題として感じられる。講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行业況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。少人数教育を実施しているからこそ、受け身ではなく積極的な姿勢をもつきっかけにしてもらいたい。



社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木 剛

認知症の理解Ⅱ(講義)、介護過程Ⅰ(講義)、介護福祉論Ⅱ(講義)、発展介護過程(講義)、高齢者の生活の理解Ⅱ(講義)

## I. 授業の目標・工夫など

### 1) 認知症の理解Ⅱ

本授業の目標は、認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状(BPSD)、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材(DVD等)の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

### 2) 介護過程Ⅰ

本授業の目標は、介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、練習問題の作成等の工夫をした。

### 3) 介護福祉論Ⅱ

本授業の目標は、社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることである。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、要点をまとめたレジュメのほか、関連資料の配布、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。なお、レジュメの作成にあたっては、行間を確保してメモを取りやすくする等の配慮をした。

### 4) 発展介護過程

本授業の目標は、介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等である。学生の介護過程展開の力量を高めるために、担当教員ごとに少人数のグループを編成し、ケアカンファレンスを開催するなどしてグループ内で意見交換ができるように工夫した。

### 5) 高齢者の生活の理解Ⅱ

本授業の目標は、要介護高齢者の自立とその支援の考え方、介護と看護の概念、介護が必要となった要因、社会資源、介護保険サービスの主な特性などについて理解するとともに、これらを他者に説明できることである。学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、最近の新聞記事の紹介、視聴覚教材の活用などの工夫をした。

## II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### 1) 認知症の理解Ⅱ

授業評価アンケートにおける「Ⅱ 授業について」の平均点は、「4.62」であった。また、学生のコメントとして、「一つ一つの説明が丁寧ですごく理解しやすかった」、「資料が毎回丁寧で分かりやすく、授業も非常にうけていて良かったと思います」、「毎授業の内容がわかりやすかった（一例が書かれているところが多くあったから）」等のポジティブな感想が大半をしめたが、その反面、「生徒の主体性を活かす授業があってもいいのではないのでしょうか（考えさせる授業）」との感想もあった。

上記の結果から、授業の工夫により概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、更に満足度を高めるために事例などを用いて考える機会を増やしていきたい。

### 2) 介護過程Ⅰ

授業評価アンケートにおける「Ⅱ 授業について」の平均点は、「4.72」であった。また、学生のコメントとして、「くり返しくり返し説明して下さったのでよく定着した」、「授業プリントがまとまっていて分かりやすかった」、「重要なところを特に大事につたえてくれた」等のポジティブな感想があった。

上記の結果から、授業の工夫により学生の満足感を得ることができたと考える。

### 3) 介護福祉論Ⅱ

授業評価アンケートにおける「Ⅱ 授業について」の平均点は、「4.45」であった。また、「Ⅲ 遠隔授業について」の平均点は「4.67」であった。学生のコメントとして、「ユニパでの課題を授業で解説があり、分かりやすかった」とのポジティブな感想があった。

上記の結果から、授業の工夫により概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、更に満足度を高めるために学生の理解度に応じた補習等の試みを検討したい。

### 4) 発展介護過程

授業評価アンケートにおける「Ⅱ 授業について」の平均点は、「4.76」であった。また、学生のコメントとして、「ケアカンファレンスのできたので良かった」、「最後に今後注意することをおしえて頂いて良かった」とのポジティブな感想があった。

上記の結果から、授業の工夫により学生の満足感を得ることができたと考える。

### 5) 高齢者の生活の理解Ⅱ

授業評価アンケートにおける「Ⅱ 授業について」の平均点は、「4.48」であった。また、「Ⅲ 遠隔授業について」の平均点は「4.89」であった。学生のコメントとして、「ビデオで補足して分かりやすい」とのポジティブな感想があった。

上記の結果から、授業の工夫により概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、更に満足度を高めるために学生の理解度に応じた補習等の試みを検討したい。

学科:社会福祉学科・介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ(演習)、介護レクリエーションⅠ(演習)、  
介護実習指導Ⅱ(演習)、子ども家庭支援論(講義)

### I 授業の目標・工夫など

新型コロナウイルス感染症への対応として、オンラインと対面授業の混合方式を充実させること、感染者・濃厚接触者の増大にともなう実習日程の変更、実習期間延長などの調整と個別対応が課題となった。

とくに「介護実習指導Ⅱ」の個別指導では、感染予防のため遠距離通学の学生を中心に、希望者には遠隔での個別対応を実施し、課題指導や報告書作成などは、教員とのメールの往復によって進める方式と対面指導とのハイブリッド方式をとった。その他の前期授業では、原則として対面での授業を実施した。

後期は「子ども家庭支援論」を対面授業で始め、実習期間が授業と重複する学生に対しては最大2回分の課題提示型遠隔授業で対応した。この科目は、保育現場を想定した事例において、家庭支援の実践力向上をはかるため、感染防止対策を十分にとったうえで、保護者対応失敗事例のディスカッションや、改善に向けてのロールプレイを重ねることにより学習効果をねらった。また、遠隔授業では、子育て支援関連法制度の理解を深める目的で、制度の内容をカルタの読み札として作成することを課題とし、対戦形式で年始の授業に活用した。読み札作成過程において、制度の特色や類似の法律との差異についての理解を深め、勉強していないと判断しにくい札作りを工夫することによって主体的に学べること、対戦方式で学習成果を自分で測れることなど、学生の意欲喚起と授業効果の向上をねらった。

### II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

昨年度との比較でみると、「介護レクリエーションⅠ」(4.74➡4.63)でやや評価が下がっているほかは、すべての科目で評価の上昇傾向が見られた(「生活支援技術Ⅰ」で 4.51➡4.6、「家族福祉論」4.24➡4.63、「子ども家庭支援論」4.2➡4.34、「介護実習指導Ⅱ」4.75➡4.75)。

これらの科目では、ロールプレイやグループワークの機会が多く、コロナ禍での密を避けるために、感染拡大期はグループワークを最小限にとどめ、コロナ前より授業効果を上げにくかったが、昨年度はグループワークを解禁したことにより、授業満足度が回復したのではないかと考えている。自由記述では、「ロールプレイを通して実践的にそれぞれの役割・必要性・改善策について学べた」、「ロールプレイは机上で学べないことを実践することで発見して学べた」「ロールプレイで実際にやることで気づくことも多かったし、楽しかった」等、ロールプレイを中心にアクティブ・ラーニングへの支持が高かった。

一方、コロナ禍で対面指導を避け、zoom・メールによる個別指導で課題や報告書の作成をサポートした「介護実習指導Ⅱ」では、1対1の個別対応に学生の評価は高まり、「先生方の指導が熱心で良かったです。嬉しかった」などの評価が寄せられた。昨年度から「介護実践研究」が加わり、手厚い個別指導を要することが、高評価に結びついているものと思われる。学生をスポイルしない

程度に個別対応に努め、学生の研究関心を引き出しつつ自主自立を支援していく必要がある。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、コロナ禍での制約を経験して、学びの意欲喚起や、授業への関心・集中力の向上に効果があることを確認できた。また、個別対応による学生指導の効果も顕著であったため、今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けたい。そして、遠隔指導における意思疎通や効果的なプレゼンテーション方法において、新たな工夫を模索し、学生が積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたいと考える。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:木林身江子  
対象科目:身体のしくみⅠ(講義)、介護過程Ⅳ(講義)、医療的ケアⅠ(講義)、  
医療的ケアⅡ(講義・演習)、医療的ケアⅢ(講義・演習)

「身体のしくみⅠ」は、テキストを中心に、必要に応じ別途資料を配布して対面授業を実施した。昨年度と比較すると全体的に評価が下がっており、授業の内容や量・範囲、課題の質・量について、学生の理解度に応じた内容・進捗となるよう検討する必要がある。

また、学生自身の努力という側面においても評価が低かったことから、授業への関心を高める工夫をしながら、予習復習行動につながるサポートをしていきたいと考える。具体的には、ミニテストや感想・質問用紙などを活用していきたい。特に国家試験を念頭においたミニテストの複数回の実施については、肯定的に受け止めている自由記述が多かったことから、学生とコミュニケーションをはかりながら関心と理解が高まる授業運営に努めたいと思う。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害等、内部障害のある人について、医学的知識に基づいた分析により適切な介護・生活支援計画を立案するという介護過程の展開能力を養うことを目指している。

令和4年度は、対面授業で使用する資料について更なる改善に努めた。前年度の内容を精査し、1年次の「身体のしくみ」の復習を含め、端的な文章、穴埋め形式、図表やイラストを盛り込んで視覚的にも分かりやすく理解を深められるような資料に改良した。また、遠隔授業では、対面授業の学習内容を復習することにより回答できる課題を提示した。

全体的には学科・専攻平均点を上回る高評価が得られ、学生の理解度に応じた授業展開ができたと考える。課題の量と質についても概ね適切であり、基本的な知識の習得につながったと評価できた。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や痰の吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。令和4年度は、対面と遠隔を組み合わせる授業を実施した。対面授業では、医療的ケアの基本事項、感染予防策などの講義をはじめ、尊厳、倫理上の留意点など、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えさせるような機会も作ることもできた。また、バイタルサイン測定や感染予防策に関しては、演習も含めながら具体的な手順や留意点の学習機会を提供することができた。全体的な評価は学科平均を少し上回る程度であったが、映像視聴やグループワークを取り入れるなど、今後も教授方法の工夫に努めたいと考える。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、遠隔授業と対面授業を組み合わせる授業を実施した。遠隔授業では、基本的な知識の習得を目的に、主にテキストの各章にある設問を課題として提示した。提出されたレポートの内容からは、概ね適切な理解がなされたと評価することができた。また、量・質の適切性および難易度については、概ね適切であったと評価できた。一方、技術演習については高い評価であった。用手微振動やポジショニングは、感染予防のため昨年度に引き続き演習を取り止め、経管

栄養、喀痰吸引に絞り、1 グループあたりの学生数を少なくするなど感染予防に努めながら実施した。学生たちは、落ち着いた環境のなかで、非常に能率的に集中して練習に励み、技術試験にも意欲的に取り組むことができていた。学生個々に対する丁寧な指導は学生の満足度も非常に高く、次年度以降も、指導内容・方法の工夫に努めたいと考える。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:鈴木俊文  
対象科目:福祉経営とリーダーシップ(講義)、介護福祉論Ⅰ(講義)、高齢者の生活の理解Ⅰ(講義)、発展介護技術(演習)、介護過程Ⅱ(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、介護福祉論(講義)、老人福祉論(講義)、児童・家族福祉支援論(講義)、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究、介護概論・介護技術(講義・演習)、社会福祉論(講義)

## I 授業の目標・工夫した点

当該年度は、介護福祉専攻担当科目で新たに「介護福祉論Ⅰ」「高齢者の生活の理解Ⅰ」、社会福祉専攻で「老人福祉論」、歯科衛生学科で「社会福祉論」「児童・家族福祉支援論」の一部を担当した。いずれも講義科目であり、筆者が専門とする高齢者福祉及び介護人材研究の成果をふまえ、講義資料の作成と授業運営を行った。講義資料の工夫は、概念的な用語解説をテキスト活用による説明を強化することに加え、関連する諸制度の条文等法的な位置づけによる「用語の活用」と、実践的なサービスにおいて、専門職者や利用者が活用している「支援内容、支援説明としての用語」を比較しながら授業を行った。

また、筆者が継続的に担当している「福祉経営とリーダーシップ(介護福祉専攻)」、「介護福祉論(社会福祉専攻)」「保育実践演習・卒業研究(社会福祉専攻)」、「介護概論・介護技術(歯科衛生学科)」等の授業では、当該年度も介護の対象やサービスマネジメントを含む支援技術に関心の高い受講者が数多く履修したため、介護技術やケマネジメントの演習を取り入れた。あわせて、医療・保健・福祉に関連する制度改正をふまえて、実践事例を活用した教材開発を今年度も継続し、演習や事例教材を更新した。コロナ禍の対応として、グループワークによる対話的演習を縮小した一方で、授業内課題を増やし、この添削をコメント付きで学生全体にフィードバックすることで、多様な意見や学習を履修者全体で共有することに努めた。

## II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価はいずれも学科平均より高い評価を得ることができた。今年度はコロナ禍の影響をふまえ、過去授業ほどの活発なグループワークは実践できなかったが、自由記述には「考える機会になった」とする記述が数多くみられた。これらは、事例教材の強化とあわせて、授業内課題に厚みをもたせ、これらの個別添削によるフィードバックと、履修者全体での共有を目的とした授業時のフィードバックを重ねた結果であると考え。一方で、社会福祉専攻の老人福祉論の授業評価は、学科平均を大きく上回る評価を得た一方で、筆者が担当する科目の中で、「予習・復習をして理解を深めることができたか」という項目で、最も低い結果がみられた。当該科目は、社会福祉士養成課程におけるカリキュラム改正に基づき、今年度より新たに授業を計画し運用したことから、教員である筆者自身の理解や授業内容を正確に伝える意識が強くなり、配布資料の内容や授業時の解説において、教員による説明的な時間の比重が高くなり、学生自身による疑問点を含めて予習や復習への動機づけを低くしてしまったとも考えられる。この点を今後の課題として、改善していきたい。

学科:社会福祉学科 職名:講師 氏名:濱口晋

対象科目:コミュニケーションⅠ(講義)、コミュニケーションⅡ(講義)、介護過程Ⅱ(演習)

介護実習指導Ⅰ(演習)、介護福祉演習(演習)

## I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程Ⅱ」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。この2科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用と位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、新型コロナウイルス感染症予防にも努めながら、対面授業をできるだけ実施し、演習を取り入れるようにした。演習時には、マスク着用とフェイスシールドを使用したため、マスクやフェイスシールド使用時のコミュニケーション技術を考える演習を行うことができた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、対面授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習も行った。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について(Ⅱ 授業について 平均 4.03~4.45 範囲 3.82~4.63)

「コミュニケーションⅠ」について「(10)授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」は、以前類似した質問項目は3.94と4.00未満であったが、今年度と4.42と評価が若干改善していた。「(12)教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(13)教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」・「(14)教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」の項目、4.37~4.47と評価であった。一方で「説明が長く、わかりづらかった」との意見もあった。過去にも、『パワーポイントのスライドが速い』や『話す口調やタイミングによりわかりにくい』などの意見もあり、今後もわかりやすく話すよう心掛けたい。「コミュニケーションⅡ」については、昨年の「コミュニケーションⅡ」に比べ、低下した。(Ⅱ 授業について 平均昨年 4.52→4.02)。『パワーポイントのスライドと配布資料の内容が異なっている』という意見があり、作成時に確認し、異なる場合しっかり説明していきたい。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。『先生に質問がしやすかった』との意見もあり、一人ひとりの学生に、より丁寧に対応していきたい。(Ⅲ 遠隔授業の方法については、昨年度『もっと対面で学びたかった』との



声があり、できるだけ対面授業で実施した

「介護過程Ⅱ」については、(Ⅱ 授業について 平均 4.02 範囲 3.95～4.10) であり、複数教員のオムニバス形式の授業でもあるため、今後他の教員と一緒に内容について見直しをしていきたい。また、昨年度外部講師と障害者支援施設職員に講義いただき、『演習しながら、楽しく学ぶことができた』という声もあったので、引き続きゲストスピーカーも呼んでいきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、(授業について、4.05～4.20 昨年度 4.50～4.80 に比べ低下した。コロナ禍であったが、実習に関する科目であったため、全体指導や個別指導ともに、対面授業で実施した。『ゲストスピーカーの話がためになった』という意見が多かったので、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。一方で『ゲストスピーカーへの質問へのフィードバックが欲しい』との意見があり、フィードバックするよう心がけたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.63～4.75、昨年度 4.47～4.80、評価は高かった。この科目では、ユニバーサルパスポートや ZOOM 等積極的に併用した結果、学生の自主勉強を促し、効果的に活用できることもわかった。その結果、4年連続介護福祉士国家試験合格率 100%を達成し、また、令和2年度から公表された養成施設別合格率も合格者数で3年連続の全国上位の結果を収めることができた。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・介護福祉専攻 職名:助教 氏名:安瓊伊  
対象科目:高齢者の生活の理解Ⅱ(講義)

本科目については、15コマのうち5コマの授業を担当した。介護を必要とする人の生活やニーズ、生活を支える資源についてのデータと映像を教材として使用した。講義内容の理解を深められるように、自分自身の生活と照らし合わせてディスカッションするグループワークを行った。また、授業冒頭に前回の講義内容のおさらいを行い、関連性をもって講義内容を理解してもらうよう努めた。

授業評価アンケート結果から、学生にとって授業の量と範囲、課題学習の量・質について学生の評価が低かったことから、授業時間内に講義内容を理解することが難しかったと判断し、今後学生の理解度に配慮した内容・量について改善を図っていきたい。自由記述では、動画をとおして講義内容の理解が高まったという学生の意見があり、映像を活用したグループワークを検討していきたい。

学生には、授業内容が分からなかった場合には、授業時間中に積極的に質問をしてほしい。また、配布した資料をもって復習をしてほしい。それでも理解できなかった内容については次回の授業でのおさらい時間に質問してほしい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:助教 氏名:大石桂子

対象科目:介護過程Ⅱ(講義)、認知症の理解Ⅰ(講義)、基礎介護技術(演習)、応用介護技術(演習)、

発展介護技術(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導Ⅰ(演習)、介護実習指導Ⅱ(演習)

#### ・基礎介護技術、応用介護技術

学生からは、積極的に参加ができたことや、教員が演習時には適宜巡回指導をしていたことから、わからないことはその都度質問ができたという意見が多く、総合的にも、介護技術の習得が十分にできたという意見が多かった。福祉用具や介護食を授業内に取り入れたことが、学生からは良かったという意見があった。演習の時間が多いため、グループごとで取り組みの速度が違うことに対する戸惑いの声が聞かれたことから、授業運営について再度検討したい。

#### ・発展介護技術

主にグループワークの時間が多いため、担当学生の自主性を高められるように関わった。授業開始当初は、グループ内に積極的にリーダーシップをとる学生は見られなかったが、次第に学生自身で運営を行うようになっていった。授業全体としては、グループワークの難しさ、協調性の有無に関する意見が聞かれていた。

#### ・認知症の理解Ⅰ

講義内に認知症関連書籍に触れる時間を設けたり、認知症ケアに関するディスカッションを実施したりと、学生が授業内容に関心を持ち、積極的に参加できるように工夫をした。質問等については、質問カードを用いて学生からの意見、質問が出やすい状況を設けたが、アンケートでは、学生から「積極的な質問ができた」という項目が少し低かった。質疑応答を授業内で投げかけるも、積極的な発言は聞かれないため、学生の意見や質問を聞く機会は結果として不十分であったと感じているため、今後改善したい。

#### ・介護過程Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。担当する授業最終回に授業に対する感想を書いてもらったところ、理解が深まった、ディスカッションがあつてよかった、毎回前回の復習から入っていたので良かったという意見をもらった。

#### ・発展介護過程

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかったが、学生個々が積極的にディスカッションができていたことから、グループ指導は問題なかったと考える。学生の知識の到達度や教員に求めることなど、教員個別の評価がわかるように、工夫したい。

・介護実習指導Ⅰ, 介護実習指導Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。学外実習に関連する科目であることから、引き続き教員間で連携して取り組んでいきたい。

学科・専攻:こども学科 職名:教授 氏名:小林佐知子

対象科目:

<前期>「心のしくみ」(講義、介護福祉専攻 1 年)、「教育相談」(講義、こども学科 2 年)、「保育の心理学」(講義、こども学科・社会福祉専攻 1 年)、「子ども家庭支援の心理学」(講義、こども学科・社会福祉学専攻 2 年)

<後期>「発達と老化 I」(講義、介護福祉専攻 1 年)、「教育心理学」(講義、こども学科 2 年)

### 1. 授業についての自己評価

評価を受けた科目はすべて対面授業を中心に行った。一部を遠隔授業(オンデマンド)で実施した科目もあった。

前期の「心のしくみ」「教育相談」「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」は、アンケートの『あなた自身について』(授業への意欲や態度など)、『授業について』(教員の授業方法や対応の適切さ)のどちらも学科・専攻平均点を上回っており、比較的良い評価であった。後期の「発達と老化 I」「教育心理学」は、『授業について』は平均点以上である一方、『あなた自身について』は若干下回る結果であった。特に、“自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した”“自分は、予習復習をして理解を深める努力をした”の項目が低かった。コメントカードの中で質問をする学生もいるが、少数であり、直接質問する学生についてはほとんどみられなかった。自由記述を見ると、ワークプリントや資料がわかりやすいという声が多かった。また、グループワークやペアワークが良かったという声も散見され、アクティブラーニングの要素を取り入れることができていると感じる。

### 2. 今後の改善・工夫

過年度と同様、授業外の課題がほとんど設定されていないことが、予習復習の機会の少なさに関連したかもしれない。授業外課題をどうするか今後も改善する必要がある。質問は随時できるように、こちらからも声をかけるなど注意していきたい。

### 3. 学生への要望等

要望は特になし。

受講生がグループワークに積極的に協力してくれたことが、非常にありがたかった。どのような課題を設定しても、一生懸命向き合おうとする姿勢は素晴らしいと思う。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）教育課程・保育計画論（講義）幼児教育者論（講義）  
保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導（共同）教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

本年度は、対面授業を実施でき、グループワークは減ったもののほぼコロナ対応前の授業ができた。

こども1年生前期科目「保育内容（総論）」「幼児教育者論（講義）」社福2年生前期科目「保育者論」は、学生の評価にあったように、学生自身も積極的に学ぶ姿勢で取り組んでくれたことが良かったと思う。「幼児教育者論（講義）」「保育者論」ではバリアフリー児童図書展がコロナのため例年のようには実施できなかったのも、学生にのみ閲覧し、学部講師に講演をしてもらったが、「対談できてよかった」との感想があり、成果を感じた。また、「自分で考える機会がたくさんあり、友達の意見も聞く機会もあることで考えが深まった」という意見がありそう感じてくれたことはよかった。4番目の質問項目「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」については、同一の授業であるのに1年生は3.61点、2年生は3.97点と差があったのは、経験の差か個性の差ではないかと思う。「保育内容総論」ではDVD等を活用した授業について「理解が深まった」「保育とは何かを知ることができて学びとなった」という意見が多くあった一方で「画面酔いしてしまった」学生もいて申し訳なかった。

こども学科1年後期科目「教育原理」については、「自分で調べて発表するのは大変でしたが、興味を持つきっかけになった」という意見がすべてを物語っている。大変だったと思うが、その意味を感じてくれてありがたく思う。また「テスト範囲がわからない」という声があったが、こればかりは限定できないため仕方ないのではないかと思う。こども学科1年、社福1年後期科目「教育課程・保育計画論」については、大変な科目であるにもかかわらず総じて評価が高くこれも学生の前向きな授業姿勢が反映されていると感じる。「指導案のねらいと内容の違いが最初はあまりわかりませんでした、少しずつわかってきました。」という声は大変ありがたくやりがいを感じさせられた。こども学科1年、社福1年後期科目「保育内容指導法（言葉）」については、「考えることが多く勉強になった」「分かりやすい工夫がされていた」という意見が多く良かったのではないかと思う。「補講・休講は事前に知らせてほしい」という意見があったが、知らせているので運悪く聞き逃したのではないかと思う。ユニバなどに休講・補講の一覧が出るような機能があると良いのではないかと思う。

また、実習の授業のみ答える設問、遠隔授業をした場合のみ答える設問に、答えてしまう人が数名いて、（よくわからないに回答）これらについて注意をすればよかったのかもしれないが、他の授業ではどうしているのか気になった。

全体的に、本学の学生の気質が分かったうえで授業を考えることができた。令和 5 年度も引き続きよいと言われた面を意識して授業を構想していきたい。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:及川直樹

対象科目:保育内容指導法(健康)(演習)

「Ⅰ あなた自身について」と「Ⅱ 授業について」の平均点は、いずれも4点以上であったが、学科専攻の平均点をわずかに下回る結果となった。Ⅰでは、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の平均点が3.55点と、全ての項目を通じて最も低かった。Ⅱでは、「教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」の平均点が低かった。これらの項目の評価を改善するために、特に事例検討を行う場合には、学生を指名して自身の考えを述べさせたり、授業中および授業後に学生からの質問を受け付ける機会を設けたりすることを検討したい。なお、自由記述において、教室内の照明によるスライドの見づらさが指摘された。この点については、他の担当授業も含めて対応していきたい。



学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美

対象科目：子どもと環境（演習）・特別な教育的ニーズの理解と支援（演習）

### 【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

#### 授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、対面あるいは動画に編集して提示した。授業では、次回のまでに事前学習も提示しているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

グループ活動に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

#### 今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・学生の質問に対してさらに丁寧な返答を心がける。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。
- ・課題の提出期限などを更に明確に提示していく。

#### 学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で実践していくことが望まれる内容である。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。多忙な毎日であると思うが、自分を見つめなおす、保育の根本を考える（書物を読むなど）の機会を是非取っていただきたい。人（社会）の中には色々な意見がある。今は同じような価値観を持った集団にいるためにあまり感じないと思うが、社会の中では自分の意に反して動くことも多い。そしてそれが日常である。多くの意見を受け止めることができる寛容な心を持ってほしい。また、学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいく態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:藤田雅也

対象科目:保育内容の理解と方法Ⅰ(造形)(演習)、保育内容の理解と方法Ⅱ(造形)(演習)、  
保育内容指導法(表現)(演習)、子どもの表現Ⅱ(演習)、介護レクリエーションⅢ(演習)

## Ⅰ. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

### ○保育内容の理解と方法Ⅰ(造形)

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

### ○保育内容の理解と方法Ⅱ(造形)

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

### ○保育内容指導法(表現)

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

### ○子どもの表現Ⅱ

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

### ○介護レクリエーションⅢ

造形表現活動(描くこと・つくること・みること)を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

## Ⅱ. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### ○保育内容の理解と方法Ⅰ(造形)

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については、当科目平均点が4.84と高い数値結果であった。また、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目についても、「遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった」(当科目平均点:4.94)など、肯定的な回答が多かった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にしたい。自由記述には、「楽しく主体的に学ぶことができてよかった」「授業や課題がそのまま保育者になったときに生きるのに、とてもためになった」「グループワークなどで話し合いながら行えたので、周りや意見交換をしながら楽しく参加できた」などが挙げられた。

### ○保育内容の理解と方法Ⅱ(造形)

「Ⅱ 授業について」の項目については、当科目平均点が 4.73 と高い数値結果であった。授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「友達との会話を通して新しく発見できたこともあり、良かった」「新しい発見をしたら、次に活かせるように考えることを大切にしたい」などがあった。

#### ○保育内容指導法(表現)

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.85、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.80 と高い数値結果であった。授業では、5 領域を総合的に学ぶオリジナルシアターの制作と発表や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「模擬保育などから学べることが多く楽しかった」「学生が主体的になるようにして、どの授業も印象的だった」などが挙げられた。

#### ○子どもの表現 B

「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.74、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.83と高い数値結果であった。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。自由記述には、「保育現場で子どもと楽しめる造形活動を実践でき、たのしかった。今後は自分なりのアイデアも加えて遊びの発展を考えたいと思った」「先生と一緒にとても楽しんでくれたり、学生が主体的に学べる環境が整えられたりして、とても楽しんで学ぶことができた」などが挙げられた。

#### ○介護レクリエーションⅢ

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.91、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.89 と高い数値結果であった。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にされた。自由記述には、「どの内容も夢中になって楽しむことができた」「丁寧な解説と、先生自らが見本を見せていただくことから始まり、わかりやすい授業でした」「この授業を通して、自分でも行えることが多く、新たなレクリエーションとして今後実施できると感じた」などが挙げられた。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:松浦崇

対象科目:社会的養護Ⅰ(講義)、社会的養護Ⅱ(演習)、子ども家庭福祉(講義)、  
子育て支援(こども学科)(演習)、子育て支援(社会福祉専攻)(演習)  
人間関係と援助技術(講義:オムニバス)

### I 授業の目標・工夫など

2022年度は、「人間関係と援助技術」を除き、原則「対面」にて授業を行いました。

「社会的養護Ⅰ」・「Ⅱ」は、保育所保育のイメージが強い中、社会的養護(施設養護・里親制度)について理解を深め、なるべく具体的なイメージをもつことができるよう、映像資料をはじめ、新聞記事や当事者による漫画・手記などの資料を多く活用しました。

「子ども家庭福祉」「子育て支援」においては、児童福祉や子育て支援に関わる法制度・施策について、他人事ではなく身近な問題として捉えることができるよう、新聞記事や動画、映像資料などを活用し、当事者が置かれている状況、社会的背景の理解ができるよう努めました。また、こども家庭庁の設置をはじめ、制度の改革が矢継ぎ早に進んでいることから、最新の動向について多く触れるようにしました。

全学共通科目である「人間関係と援助技術」については、人数も多く、複数の学科・専攻にまたがることから「遠隔授業」を基本とし、課題の提出期限を長めに設定しました。また、最後に1回「対面授業」を実施し、学科・専攻間でグループワークを行うことで、他の学科・専攻の専門性、多職種連携について理解を深めることができました。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

全体として、平均を超える高い評価を得ることができたと考えています。

自由記述では、「映像資料を通して理解が深まった」という意見が多くありました。また、「レジュメがわかりやすかった」など、授業の方法について評価をいただきました。今後も、資料を適切に活用しながら、丁寧な授業に努めていきたいと思えます。

他方、「教員に質問した」、「予習復習をして理解を深める努力をした」など、「あなた(学生)自身の取り組みについて」の項目については、全体の傾向と同じく、担当教科でも低めの評価となりました。コロナによる影響も少なくなりつつある中、改めて、学生の主体的な学びを促す授業づくりについて工夫していきたいと考えています。「人間関係と援助技術」で実施した学科・専攻間でのグループワークについて「良かった」という意見が多かったため、グループワークの導入などをさらに進めていきたいと思えます。

### III まとめ

2022年度は、対面授業の機会が多くなり、学生の皆さんの学ぶ姿を目にする中で、学習に対する高い意欲を感じることができました。

こども基本法の成立、こども家庭庁の創設など、こども関連施策が大きく進む中、保育者

に求められる役割はさらに高まっています。授業でも、そうした社会的動向を正確におさえ、かつ、子どもや保護者をはじめとする当事者の思いを大切にされた内容となるよう、改善を進めていきたいと思ひます。

学科・専攻:こども学科 職名:講師 氏名:山本学

対象科目:保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ(音楽)(演習)、子どもの表現A(講義)、音楽通論(講義)、保育内容指導法(表現)

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

[保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ(音楽)(山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃、鈴木慶子)]

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法、リミックスのいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

1と2において、平均を上回っていた。特に学生主体となって取り組める授業環境に対して高評価であった。自由記述では、特に2が実践的な内容であったことや、自分から意欲的に授業に参加できたと書かれていた。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるよう工夫を行っている。初めて学ぶことが多く楽しかったなどの記述が多く、ありがたく思っている。

評価はⅠ、Ⅱ、Ⅲ全ての項目で平均を上回っていた。自由記述においては、これまでにあまり触れられなかった音楽に触れられたことがよかったとの記述が多かった。また、特にクラシック音楽とミュージカルシネマに対して評価が高かった。

[子どもの表現A]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。くれ読みを取り入れ、楽譜を速く読めるようにする演習や保育と音楽の論文を読む機会を作るなどの工夫をしている。評価は学科平均とほぼ同じである。特に和太鼓に触れる機会について好評であった。

[保育内容指導法(表現)]

前期はオリジナルシアター、後期は模擬保育や手遊び歌の実践、昔遊びの音楽などを取り扱う。例年通り手遊びが実践で役に立つのでよかったという記述と、主体的に活動できるのでよかったという記述が多かった。評価は3項目で全て平均を上回った。

学科・専攻:こども学科 職名:助教 氏名:名倉一美

対象科目:幼児理解(講義)、保育内容指導法(人間関係)(演習)

幼児理解(講義)は、対面授業と遠隔授業(動画配信)の選択制とした。対面と動画のどちらを受講しても内容や課題に偏りがないよう配慮をした。本講義では、保育における「記録」の重要性を上げるため、課題は記録を書く練習につながるような内容にした。対面授業では、さまざまな保育実践事例を読み、気づきを発表することで、学生同士がお互いの異なる価値観や視点に触れられるようにした。学生の発表に対する教員のコメントでは、理論的背景と関連付けながらも、学生自身の理解が深まるような具体的な話をするよう心掛けた。動画配信では、他の学生のコメントを読みあって気づきを書くことで、多面的な視野を持てるように配慮した。

保育内容指導法(人間関係)(演習)も、対面授業と動画配信による遠隔授業の選択制とした。対面と動画のどちらを受講しても内容や課題に偏りがないよう配慮をした。1講義につき1テーマを設け、講義ごとにワーク課題を設定し、各自で思考をする時間を設けた。課題によって、深く考えるきっかけとなった学生がいたようである。映像資料などを用いて、できるだけ具体的な事例と結びつけながら解説を行った。今後の課題として、テーマによる情報量の偏りがあった点が改善点である。

非常勤講師 氏名： 飯塚哲男

対象科目：ソーシャルワーク演習 I

## I、授業の目標・工夫など

### I-①『 授業の目標 』

ソーシャルワーカー（社会福祉士、保育士）等を目指し、クライアント（利用者等）、家族（介護者、保護者）、地域に対する、聴く力・説明する力・質問する力・チームアプローチ（多種職協働・連携）が発揮できるようスキル習得を図りました。言語・非言語的コミュニケーションの演習によって相談援助技術（ソーシャルワーク）の倫理綱領、行動規範対人援助職に不可欠なバイステックの7原則を踏まえ、共感と自己価値の学び・気づきを図りました。ソーシャルワーク過程におけるインテーク・アセスメント（情報収集及分析）・プランニング・ケースカンファレンス・モニタリング等の模擬体験と活用方法をグループワーク演習で実施致しました。

### I-②『 授業の工夫 』

演習始めに授業目的、目標の明示と説明を意識致しました。ソーシャルワーカーとして自己覚知（価値・倫理観）と共感的な理解を共通テーマとした。

高齢者、障害者、児童等の事例教材（レジメ、DVD、振り返り用紙など）をグループワークで学び、学生同士のピアスーパービジョン、学生と教員のライブスーパービジョンが図れるよう努めました。振り返り用紙へ記入してもらい演習効果が向上できるよう取り組んだ。振り返り用紙に関しては、講師より学生ひとりひとりにコメントを記入し教員と学生とのコミュニケーションに努めました。

学生は自らが演習参加姿勢・態度が積極的参加を得ることができました。

## II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

ソーシャルワーク演習 I は、15 回演習でした。前半、松平先生が初めてソーシャルワーク演習に参加する学生へ言語・非言語的コミュニケーション演習を通じ、アイスブレイクとソーシャルワークの基礎知識と興味・関心が多く芽生え、学生同士が打ち解けるきっかけと成長が得られました。

I あなた自身「自分（学生）はこの授業を意欲的態度で受講した。」・「この授業の内容はよく理解できた。」・「自分（学生）は、この授業を受けて、この分野に対する興味関心が増した。」等は 4.5 以上の評価でした。（学生）についての項目において「自分（学生）は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。」4.81 であった。学生評価アンケートでは、コロナ禍における「安全に



についての指導や配慮が十分なされていた」は、5.00 評価でした。

Ⅱ 授業について「学生にとって授業の目的と到達目標から見ての授業の難易度」・「授業の量と

範囲」・「教員の学生の理解度配慮」・「教員の学生理解度への授業方法の工夫」・

「教員の学生への主体性への工夫・熱意・誠意・評価」等は 4.5 以上でした。

「この授業は、新たに考えたりすることが多い内容であった。」4.81 でした。

アンケート自由記載欄は、『グループワーク活動の傾聴・共感・受容・自己覚知・プレゼンテーション能力の可能性・自身の気づきなど』好転的意見や感想が多数あった。

ソーシャルワーク演習は通年 2 年です。演習Ⅲを担当する教員としてグループワーク・ライブスーパービジョンにおいて支持的機能を根底とした教育的・管理的機能の向上を図ります。演習時や振り返り用紙などでできるだけ疑問点等の解消、生徒個々への助言やクラス全体で共有できるように演習の工夫を致します。教員同士の連携・協働を図り学生の意欲向上となるよう努めます。

非常勤講師 氏名： 飯塚哲男

対象科目：ソーシャルワーク演習Ⅲ

## I、①授業の目標・②工夫など

### 1-①『 授業の目標 』

ソーシャルワークⅢ演習は30回でした。松平先生・増田先生の講師協働で学生へスーパービジョンを行いました。学生にとってソーシャルワークⅠ・Ⅱを踏まえたソーシャルワーカー（保育士、社会福祉士等）養成として、ケースワーク、グループワークにおける総合的・包括的な援助活動、相談援助実践の方法、コミュニティワークにおける地域の課題が意識できるスキル・マインド（倫理・価値）、テクニック、プレゼンテーション能力を修得する目標としました。

個人・家族・地域の事例を活用した人と環境との相互作用に関する理論とマイクロ・メゾ・マクロレベルにおけるソーシャルワークについて理解を図りました。

コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動（地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握、地域福祉計画、ネットワークング、社会資源の活用・調整・開発等）の基礎理解を図りました。

### 1-②『 授業の工夫 』

ケースワーク・多職種における総合的・包括的な援助活動、コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動等を中心にポイント明示（ソーシャルワーク倫理綱領・行動規範含む）しました。

高齢者、障害者、児童等の事例教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）を活用、意見交換等が促進できるようグループダイナミクスにて相乗効果を図っていきました。学生同士や学生と講師が意見交換できる時間設定し、振り返り用紙にて学生ひとりひとりにコメントを記入しました。

## II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

I あなた自身「自分（学生）はこの授業を意欲的態度で受講した。」・「自分（学生）は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。」平均4.80以上でした。学生評価アンケートでは、コロナ禍における「安全についての指導や配慮が十分なされていた」は、5.00評価でした。

II 授業について「学生にとって授業の目的と到達目標から見ての授業の難易度」・「授業のシラバスに沿った内容と質・量・範囲の適切性」・「教員の学生の理解度配慮」・「教員の学生理解度への授業方法の工夫」・「教員の学生への主体性への工夫・熱意・誠意・評価」・「この授業は、新たに考えたりすること

が多い内容であった。」平均 4.80 以上でした。

アンケート自由記載欄は、『グループでの活動で様々な意見が出たこと』・「話し合うことで色々な気づきや意見が得られること」「グループワークで自分の意見が言えた。」等、今後ソーシャルワーカーとしてソーシャルワークに求められる「アウトリーチ」・「ネットワーキング」・「コーディネーション」・「ネゴシエーション」・「ファシリテーション」・「プレゼンテーション」・「ソーシャルアクション」の技術の基礎的理解が体感で実感できたのではないだろうか。3名の教員協働によるスーパービジョンの支持・教育・管理的機能に努めたことの効果を確認できたのではないと考える。

引き続き、新カリキュラムを踏まえたソーシャルワークの学生自身の身近な生活より地域アセスメントを考察し、課題解決に向けて学生同士の相乗効果が高まるよう演習事例やグループダイナミクスが図れるように来年度に活かしていきます。教員同士の協働と連携を強化し、学生の参加意欲と対人援助職の自覚と希望に繋がるように、ソーシャルワーク演習の内容充実に努めます。

非常勤講師 氏名：伊東 浩太郎

対象科目：歯科放射線学（講義）

今年から静岡県立大学短期大学部で講義をさせていただくということもあり、当初はどのような内容で講義をするべきかで悩みました。

歯科放射線の分野の国家試験の出題数は多くなく、国家試験のみに的をしばってしまうと非常に情報量の少ない授業になってしまう恐れがあったため、歯科衛生士になった後役に立つ、医療人として必要な知識を教えることに重点を置きました。

放射線学という学問上、目には見えない現象を理解する必要があるため、できるだけイメージできるように多くの身近なものに例えることを意識しました。また、誰もが最初に持つ放射線学という学問に対するアレルギーを無くしたいと思い、授業の入り方を意識しました。しかしながら、それでも内容は難しかったと思います。そのため学生がついてこれているか、つまらなくなっていないかが心配でしたが、アンケートのコメントをみて杞憂であったことがわかりました。

本校の生徒さんは非常に優秀です。歯科衛生士国家試験に合格するだけにとどまらず、学んだ知識によって、この先素晴らしい医療人として歯科界を盛り上げていくことができると確信しています。この先も躓くことなく成長していってくれることを期待しています。

末筆となりますが、一生懸命授業についてきてくれた学生達、懇切丁寧に対応して下さった池ヶ谷様、長谷様ならびに静岡県立大学短期大学部関係者の皆様にお礼申し上げます。

非常勤講師 氏名：伊藤純子、杉浦寿子  
対象科目：発達と老化Ⅱ（講義）

### I. 授業の目標・工夫

本科目では、高齢者の生活史を縦断的に捉えた上で、老化に伴う心身の変化を学び、それが日常生活にどのような影響を及ぼすのかを筋道立てて説明できることを目標とした。特に、高齢者に発症しやすい疾患及び症状のあらわれの特徴を理解した上で、それをどのように日常生活の配慮に繋げ、よりよい支援のために生かせるかという問題意識に結びつけて考察できる力量を培うことを重視した。

目標達成のための工夫として、本科目では反転授業を取り入れた。反転授業は、学生が自ら能動的に学びに向かうよう設計された授業である「アクティブ・ラーニング」の方法の1つである。従来の講義形式の教室内学習を事前学習で行い、発展学習として演習や議論を教室内で行うという、授業形態を入れ替える教授学習の様式であり、知識の提供が予習で行われるので、授業では予習知識を用いた発展学習を行うものである（中村ら、2018）。事前事後学習をしっかりと行うことが受講の前提となるため、主体的な学びに繋がる一方、学生によっては負担感を感じる場合もあると考えられる。

また、授業内では国試問題を活用した講義内容の解説も行い、本科目での学びが国家試験の成果に直結することを動機づけ、受講への意欲向上を促した。

### II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各評価項目ともに概ね学科・専攻の平均点に準ずる得点であり、他科目と比較しても一定の評価を得られたと考える。最も高得点を示した設問は「この授業は、新たに考えたり学んだりすることが多い内容であった」であった。これは、前述の反転授業の効果であると推測される。自由記述からは「自分達で調べてプレゼンをすることで印象に残ることが多かった」、「大変だったが、反転授業がおもしろかった」、「反転授業や国試対策など、他にはない授業内容が多く、学びが充実していた」などの肯定的な意見が見られた。高齢者に関する疾患や症状に関する学習は、医学的な知識や用語の理解を必要とし難しい側面もあるが、グループ単位、クラス全体で協力しながら丁寧に知識を補完し、議論する過程が効果的な学習に繋がったと考える。

一方、課題として「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目が学科・専攻平均点より 0.26 ポイント下回ったことが挙げられる。こまめに質疑応答の場面を設けることやユニバーサルパスポートの活用など、質問を受けやすくする工夫を検討したい。

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目：乳児保育Ⅱ

I 授業カード、授業終了後等、質問する姿が、たくさんあり、皆さん、熱心に授業に取り組む姿がありました。

II、今年度も、密になることが難しい為、授業の論議がなく、講義が一方的になり易い状況でした。そこで

毎回授業後に振り返り記入する「授業カード」での疑問や質問を大事にして、必要に応じてプリントを用意する等して、共有したほうがいい中身は、次回の授業の冒頭に全体の問題として深め、授業の充実に繋げることをしました。

III、「密の関係の中で発達する乳幼児時代」その密を避けることが命を守ると言う厳しい時代に直面して3年。「今何が出来るか？」が広がる中、未来を生きる子ども達が戻らない時代の「今、何が大事か？」を考えより「専門性」に磨きをかけ『子どもの発達を保障する保育』の学びを続け、専門性の高い実践力を身に付けてほしいと願っています。

IV、総合評価から、

保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って「実践を科学する」視点で、理論を日常の具体的実践と結びつけて授業を行っていますが今年も、ねらいが一定に達せられていることが分かり、嬉しく思っています。

これからも学び続け「子どもの笑顔が溢れる」専門性の高い保育創造を期待しています。

非常勤講師 氏名：小高研人  
対象科目 口腔解剖学（講義・実習）

口腔解剖学は歯の形態を学ぶ科目であるため、教科書の文章を暗記することと同時にそれぞれの歯の形態的特徴を理解して表現できるようになることが重要である。今年度、対面講義および実習が行われるようになったことを受けて、ステップごとの歯のスケッチやワックス棒にて歯を彫刻する実習を行うことができ、学生からはいずれもおおむね好評であった。また、1年生前期の科目であるため、初めて提示する専門用語や独特の言い回しについてはその都度取り上げて丁寧に解説するよう努めた。

一方で、本教科において1コマで覚えてほしい内容は学生の予想より若干多いのに対して、不足なく伝えきるためにはある程度のペースで進行することが必須である。本講義の冒頭では教科書をベースに進めることを伝えており、ノートに写さなければならない内容はほとんどないと考えて講義を進行していたが、スライドの内容を丁寧に写したい学生や教科書に書き込みをしたくない学生からは進行が早く感じるという意見があった。いままで学んだことのない分野を学び始めることは、特に初期の段階においては理解を始めるきっかけが少ないため、かなりのストレスを伴うものであり、本科目においてもその点に配慮を欠かすことなく、分かりやすい講義・実習を心掛けたい。

非常勤講師 氏名；大藪元康  
対象科目：社会保障論Ⅱ（講義）

前年度の授業評価を受け、授業内容についてこれまでの学びを踏まえて進めるようにした。しかしながら、「学生の理解度に配慮して授業を進めた」が 3.81 となった。「そう思う」25.0%、「ややそう思う」37.5%に対して、「どちらともいえない」31.3%、「あまりそう思わない」6.3%となった。このため、平均点が低くなっている。

「授業方法の工夫」についても「そう思う」31.3%、「ややそう思う」37.5%に対して、「どちらともいえない」25.0%、「あまりそう思わない」6.3%であり、平均点が 3.94 となっている。さらに、「主体的に学べる学びに取り組めるよう工夫」も「そう思う」6.3%、「ややそう思う」50.0%に対して、「どちらともいえない」43.8%と平均点が 3.63 となっており、学生が主体的に学んだ、と感じる授業になるよう、取り組むことが求められていることがわかった。

自由記述において、「良かったと思うこと」で、「今まであいまいになっていた部分を、とてもわかりやすく説明していた」「社会保障についてより深く学ぶことができた」「基本で知らなかったもしっかり説明してくれた」とある。「意見や感想」においては、「説明が難しいものを丁寧に教えてくれたため、理解が深まった」ともあり、学生間での理解度の差が生じていると考えられる。

今後は、学生一人ひとりの理解を踏まえた対応を行い、授業を展開していきたい。



非常勤講師 金子雪子

対象科目：薬理学（講義）

全体的に講義に関して私語も少なく、学生が講義に集中した雰囲気の中で講義を行えと同時に、授業評価においても意欲的な態度で受講したという自己評価も高かったことから、学生自身も積極的に取り組んでいた姿勢がうかがえ、非常に良かった。

授業の復習がしやすいということで、好評をいただいた講義後の確認テストに関しては、毎回必須としたものの、なかには講義に出席しているものの、確認テストの受験を忘れてしまったり、受験自体を放棄している学生も見受けられたことが残念であった。講義の内容で得た知識の定着にも役立つため、講義内容を忘れないうちに、すぐに復習もかねて確認テストに取り組むことが、薬理学を修得する上で非常に重要である。また、確認テストの最後の項目に自由記述項目を設けることにより、気軽に質問を受け付けられるようにした。その項目で熱心に質問をしてくる学生がいた一方で、活用していない学生も見受けられた。授業アンケートで教員に質問をしたという項目が他の項目と比較して低い点数になっているのは、質問があっても、そういった質問項目を自ら活用していなかった学生がいたためと思われる。実際に、質問した学生からは好評を得ていたことから、今後は、不明な点はわからないままにせず、教員に積極的に質問をしていく態度が期待される。

本年度講義を通して薬に対する興味を抱いた学生も多く、講義に対して前向きに取り組む学生が多かった一方で、膨大な内容に途方に暮れる学生もいた。覚えるべき内容が膨大である薬理学を1年生でしかも短期間で学習するためには、集中して講義に取り組むことに加え、予習・復習をしっかりとしないと内容の理解に追いつかない。薬理学は薬の作用を勉強する科目であり、臨床現場にも直結する内容であり、臨床現場に立つ前に、教科書やノート、配布資料を見返すことで、薬の作用をしっかりと理解し、知識や考え方を身につけて欲しい。

1年時に短期間で履修する必要があるものの、膨大な知識の習得が必要な薬理学について、より理解を進めやすくするためにも、質問に対するハードルを下げたり、スライドを工夫するなど、来年以降の講義も改善していきたい。

非常勤講師 氏名：伊藤 由彦  
対象科目：薬理学（講義）

歯科衛生学科における薬理学は、「歯科衛生士としてさまざまな背景を持つ対象に対して安全な医療を提供するために、薬物の性質、薬理作用、作用機序および副作用を理解し、医薬品に関する基本的知識を身につける。」(GIO)ことを目的としている。後期に歯科薬理学が開講されていることから、この講義では歯科と直接の関係が少ない薬全般についてと薬物の取扱に関する一般的な知識を扱う講義となっている。

薬の作用を理解するためには、基本的な生物の知識はもちろんのこと、人体の仕組みおよび疾患の起こるメカニズムの理解（前提となる知識）が必須である。開講時期が1年生前期であること、また、高等学校での生物の履修状況がまちまちであることから、講義では薬の作用を理解するために必要な前提となる知識を解りやすく解説することに多くの時間を割くようにしている。しかしながら、高等学校で生物を履修していない学生にとってはかなり難解な話を短時間でしなければならず、難しいと感じるのは当然のことと思われる。高校生物レベルの補講および機能形態学（生理学）の基本的なことを習得した後の履修がよいと考えられるが、1年生前期での開講となっており、前提知識からの説明となるため学生によっては、学ぶ範囲が広すぎるといった感想に繋がる。

講義についてはスライドの提示を主体とし、ビジュアルで要点をまとめたスライドを作成し説明を行っている。また、事前にスライドをユニバーサルパスポートを介して電子ファイルで配布し、タブレットで学習する学生や印刷物で学習する学生など、学生それぞれのやり方に合わせて資料を利用できるようにしている。講義後にはユニバーサルパスポートのテスト機能を活用して、その日の講義の復習に資するような確認テストを実施している。この確認テストにおいて自由記述欄を活用することで、講義での疑問点などを気軽に書き込めるようにしており、多くの学生から質問などを受けており、迅速に質問に答えると共に、全員に必要と思われる項目に関しては、講義に於いてもフィードバックを行っている。

薬理学は医療系学部において難しい科目として認識されていると思われる。生理学や病態に関する理解の上に薬の作用の理解が成り立つこと。また、現在進行形で薬が開発され新しい知識をどんどん求められることに起因していると考えられる。しかしながら、それは医療の進歩そのものの一部であり、医療者として新しい知識や技術を常に理解し、習得し続ける姿勢は非常に大切である。本講義では、講義で説明する内容を習得させるだけでなく、臨床の現場に於いて、新たな知識や新たな薬物に出会ったときに、自分自身でその内容を理解し、安全に患者に適応できるような方法を身につけられるような講義となるよう工夫していきたい。

非常勤講師 繁原幸子  
科目 『地域文化論』

『地域文化論』は様々な切り口で論じることができるが、ここでは毎回民俗学の手法で地域の文化を読み解いている。長年にわたるフィールドでの民俗調査の経験から静岡という地域の文化を論じているのだが、毎回学生の興味のあるなしがはっきり出て来る。これはどこから来るかといえば、個人的興味もそうだが、親や祖父母、地域の人からの民俗的な話を聞いた学生や個人の体験（祭りのこと、盆正月などの年中行事、葬式や結婚式、自分の成人式といった人生儀礼、地域の災害など）のあるなしに関係しているようだ。さらに明らかに間違った聞き方、解釈をしている学生もいて、これに関しては講義後のコメントでかなりわかるので次の時間に訂正できるのだが、書き込みがなければそのままになる。そういう間違える学生が一人でもいる場合、その年度の講義説明には時間をかけたつもりではいたが、興味のない学生には講義展開も難しいらしい。説明をより簡単にし、民俗学では事例が昔のことに遡ることが多いので、なるべく現在の社会からの提言という形にしたい。さらに年々民俗的体験が少ない学生が増えていくようで、年齢が学生の祖父母に近い自分が語り部になるのかと思いつつ、懇切丁寧な説明も今まで以上に必要と思われる。中には講義内容そのものが理解できない学生がいるようで、板書を多くして、パワーポイントの量やテキスト代わりの資料もさらに量を減らす必要があるのかもしれない。

資格などに繋がらない講義ではあるが、自分の身近な場所の生活文化の話であるので、もう少し目を向けて欲しいと思う

非常勤講師 氏名：末永美雪

対象科目：生活支援技術Ⅲ

本授業は、実習と演習で構成されている。調理実習を中心としている為、学生は大変楽しみにしている反面、技術的には不安も感じる場合もある。

負担が過重にならぬよう内容には配慮して実施した。

また、コロナ感染対応にも十分指導・配慮した。

『授業の予習復習』のアンケート結果が他と比べると若干低いが、実習で学んだ献立を家庭で家族の為に作ったと報告してくれる学生もいたので担当教員としては嬉しく感じた。

介護福祉の学生にとって、食支援は大変重要である。

知識と技術を同時に学べる授業であり、将来に役立つ授業であるので積極的に取り組んでもらう事を願う。

非常勤講師 氏名：瀬戸知也  
対象科目：教育社会学（講義）

## 1. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫について

### （1）「良かった点」について：

・受講学生へのアンケートの「自由記述欄」では、パワーポイント資料や各種の動画資料の提示に関しては、肯定的な感想が多く記述されていたため、今後の授業においても、パワーポイント資料や動画資料をより充実させ、より有効な参考資料や参考動画を活用した授業を展開していきたいと考えている。

### （2）「改善が必要な点」について：

・受講学生へのアンケートの「自由記述欄」に、動画資料や音声資料の再生上の不具合を改善してほしいという要望がみられたため、今後の授業では、授業を実施する前におこなう動画資料や音声資料の再生にかかわる確認作業をより厳密におこなった上で、授業を実施するようにしたい。

## 2. 学生に期待すること：

・授業の内容に関心をもった場合は、授業で提示された事柄の理解にとどまらず、そこで生じた疑問や興味関心を大事にしてほしいと思う。授業は、当該領域における様々な問題の所在を知ってもらうためのものであり、学習の出発点である。学生にとってより重要なことは、授業を受けた後に、授業を受けて疑問に思ったことや興味・関心をもったことを、自分の力で納得のいくまで追究していくことである。そこを大切にしてもらいたい。

非常勤講師 田口 喜久恵

対象科目：保育内容の理解と方法1（身体）

[授業の良い点]

- ・動画や映像をみることで何が重要なのか理解が深まった（他10人）
- ・感想を書くことで、具体的健康について知ることができた。
- ・デジタル社会の弊害について改めて考えるきっかけになった。

[授業での改善]

- ・プリント配布を望む。
- ・何が大切なのかたどり着くまでの時間が長かった。ビデオの意味も内容にそ  
ってるのかわらない
- ・スライド移動がはやい早くノートが書けない。
- ・毎回同じことしか教えてくれない。同じ授業×15回だった。

[授業に対する意見や感想]

- ・前期の間、非認知能力などについて深く知ることができました。ありがとうございました。
- ・とても面白かったし、もっと深く学んでみたいと感じた。
- ・新しい学びが沢山ありました。
- ・デジタル化は今後も進むと思うので、そのような状況の中で自分が何をすべき  
なのかをもっと考えていきたいと思います。

[今後の課題]

- ・子どもの育ちと健康を支えるためには、保育者自身の非認知能力が求められる。  
そのために映像や動画を準備したが、本学生には効果が高かった。また授業は教科書  
の内容を展開し、予習・復習に使用するよう説明したがそれでも、資料やプリントを  
求める学生が多く、主体的に学ぶ学習姿勢を身につけるような工夫がさらに必要と感  
じた。

非常勤講師：田口 喜久恵

対象科目：子どもの健康

[授業で良かったこと]

- ・ 具体的エピソードを用いて、分かりやすかった。
- ・ 子どもの現状や子どもの健康への課題について理解することができた。
- ・ 全てが聴く授業ではなく、学生が考えて話す部分があった所。
- ・ 実際の保育の映像などが見れたことで分かりやすかった。
- ・ DVD や写真を見ながらだったので学びが深まった。

[授業での改善]

- ・ 授業プリント（レジュメ、資料）を配布してほしい。（他 6 名）
- ・ やる内容が少しごちゃごちゃしてしまい困難してしまった。

[今後の課題]

ヒトの子育ては本来生物的営為として共生社会のなかで続いてきた。デジタル社会の進展は、子どもの自然性の乖離を生み、子どもの育ちの異変として表れてきていることを認識し、子どもの健全な発育発達には幼少期に〈自然、人、身体活動〉の溢れた環境が必要であることを強調していきたい。

非常勤講師 氏名：竹内政昭

対象科目：司法福祉（更生保護）（講義）

- ・更生保護の分野は、皆さんにとっては新聞やテレビの向う側の話になるため、授業では話を聞くだけになりがちですが、予習として報道されている事件や事故について少し考えてくると、話の内容も良く見えてくると思います。また、刑務所や少年院を出所した人は、どこで、どんな生活を送っているのか想像してみてください。



非常勤講師 氏名：田崎裕美

対象科目：食生活と環境（講義）

本授業では、現代の食生活の現状と課題について、生活環境という視点から取りあげながら、自分自身や家族等の健康と食生活を見直し、様々な課題レポートや小テストに取り組みました。全般的に、授業評価アンケートの結果は、各項目共に高く、授業内容に興味を持って、熱心に取り組んでいただけたことが分かりました。

本授業を通じて、課題レポートでは、自らの関心を持ったテーマについて、より広い視点から、深くまとめることが出来たと思います。意見欄に、課題レポートが多かったことがありましたが、授業は事前・事後学習と組み合わせで初めて、成果があがるため、課題をださせていただきました。熱心な学生の方々が多く、本当にしっかりと取り組めたと感じております。

この学習の成果を生かして、健康と環境に配慮した豊かな食生活を心がけてください。

非常勤講師 氏名：富永恵子

対象科目：臨床心理（講義）、カウンセリング入門（講義）

「臨床心理」の授業は人間の「生まれてから死ぬまでのライフ・サイクル」の中での発達課題とそれを乗り越える過程を学びながら、自分のこれまでの人生をふり返りまたこれからの人生をイメージすることで、自己理解を深めこれから出会うであろう課題に向き合う力を醸成することを目的として実施しました。

歯科衛生士としての学びとは少し違う内容で、毎回グループでの話し合いを行ったのですが、学生の反応は「自分を見直すよいきっかけとなった」「興味を持てる内容で考えることが多かった」「グループの話し合いでいろいろな意見が聞けてよかった」などといった感想があり、新たな学びがあったように思われます。平均点は4.70と学科平均点を若干上回っていました。しかし、グループワークの時間を負担に感じた学生もおり、「時間をもう少し短くしてほしい」「5分程度のワークに」という意見も寄せられました。じっくり時間をかけることで、互いに知り合い自己表現すること受けとめてもらうことを体感することを狙いとしていたのですが、今後ワークの時間については検討していきたいと思います。

「カウンセリング入門」はさまざまな心理療法を解説と実習で経験してもらいグループでふり返りのワークを行いました。ここでは、まず自分を知りそして他者との関わり方を知ってもらうことを目的としています。

「臨床心理」の授業課程を終了してこの授業に臨んだ学生がほとんどでしたので、グループワークに前向きに取り組み、活発に意見交換したり笑い声が出たりしてよい雰囲気での活動できていたと思います。学生からも「さまざまな療法が体験できて、楽しかった」との感想が寄せられました。

授業評価では、平均点が4.57と学科平均点をやや下回っていました。「毎回の授業の量と範囲の適切さ」(4.50)と「成績評価の方法」(4.44)の評価が低いと感じています。ワークのまとめの時間が短いと感じた学生もいたかと思います。課題については記入の時間を考慮し、より身近に考えられるようなテーマを今後工夫していきたいと思います。成績評価についてはワークに熱心に取り組むこと、考えたこと感じたことを「ふり返りシート」に記入できることを評価しますので、内容の善し悪しは評価の対象にしていません。このことを授業開始時に伝えておかななくてはいけなかったと感じています。

非常勤講師 氏名：中尾健二

対象科目：現代と哲学（講義）

全般的にアンケートの各項目について「学科・専攻平均点」と等しいか、やや上回っているもので、これらの点についてはとくに改める必要はなさそうである。自由記述もポジティブな意見が大勢を占めた。韓国側からの視点が新鮮かつ刺激的であったようだ。したがって担当教員自身が感じた反省点について以下に述べたい。

とりあげた作品のなかに『国際市場で逢いましょう』という映画がある。韓国で観客動員数歴代ベスト・スリーに入る人気作である。朝鮮戦争から海外出稼ぎ、ベトナム派兵、南北離散家族捜しといった時代を一人の男の半生を軸に描いたものなのだが、この時期の韓国は経済成長（漢江の奇跡！）の時代であると同時に軍事独裁政権が続いた時代でもある。家族のために二度も海外に出て働き、並外れた苦労をかさねた主人公に焦点があてられているものの、時代の暗い側面に光があてられることはない。たしかに最後のシーン、生き別れた妹との、テレビが主催する尋ね人ショーでの再会の演出などは、大方の感涙をさそうものではある。しかし泣けるから良い作品とはいえないだろう。朴槿恵元大統領お気に入りの作品らしいのだが、それもそうかもしれない。自分の父朴正熙元大統領の時代を比較的明るく描いているのだから。

この映画についてのレポートを読んで、受講生の反応がすこぶるよかったので、逆に失敗だったかなと思えてきてしまった。「わかりやすすぎた」か。「感動」はしばしば「考えさせない」ことを伴うからである。今回は簡単に紹介しただけにとどまった『ペパーミント・キャンディ』を来期はとりあげようかと考えている。この作品の主人公は、光州事件から経済危機の時代を生き、そして破滅していくのである。こうした作品をとおすと、ひとりの人間の幸不幸がどう社会の有り様と絡んでいるかを考えざるをえないのではないか。

非常勤講師 氏名： 長坂和則  
対象科目： ころろの障害

自由記述では、授業の内容がわかりやすく、興味・関心が増した。楽しく授業を受けることが出来た。また、この分野への先生の熱意が伝わった等々の意見をいただいた。さらに、当事者の話や講義のみだけでなく、生徒間での話し合いの場も設けて欲しいという要望があった。

今後の改善点として、コロナウイルスの感染防止策をとった上で、アクティブラーニングの実施を行い、学びを深めるよう授業での工夫を考えたい。

リアクションペーパーを使用していたが、学生がもっと質問をしやすい雰囲気と配慮を行い学生の理解度を確認をしながら授業を進めていきたい。

ひとつひとつの授業の目的を再度明確にし、身近な問題であることやこれからの支援となる利用者への理解につながるよう努力をしていきたい。

非常勤講師 中村俊彦

対象科目：介護リハビリテーション

#### 1. 授業の工夫について

- 1) 介護福祉士を目指す学生への授業は初めての経験でもあり、授業計画を立案する段階から、座学と実技の組み合わせ等について検討を重ねた。担当教員が作業療法士であることをふまえ、リハビリテーション医学を基盤に介護の臨床で役立つリハビリテーションの知識と技術を授業に盛り込むよう工夫した。
- 2) 授業では、介護の基礎知識の整理に加えて、各種自助具や様々なリハビリテーション機器、装具類の紹介と体験を導入したところ、学生の反応も上々であった。授業アンケートの結果をみても、授業目標はおおむね達成できたと考える。
- 3) 授業後半において、作業療法体験を行ったところ（授業の際や）授業アンケートで多くの満足の声を得た。今回の経験を生かして、作業療法の方法論や考え方は、介護場面での対象者とのコミュニケーションや QOL の活性化に役立つであることを伝えていきたいと考える。

#### 2. 今後の改善点など

- 1) 今回、授業を進める中で、スライドの字（フォントが小さいなど）が見にくいとの声も聞かれた。指摘を受けてからは改善に努めたが、引き続き「見やすい」、「分かりやすい」スライドや資料作成に心がけたい。
- 2) 介護福祉職とリハビリテーション職の連携の大切さを、リスク管理を含めて伝えていきたい。

非常勤講師 西田勝  
文学(講義)

授業評価アンケート集計結果に対するコメント

I での番号4と5の設問に対する評価が3.75となっており、オンデマンド形式での学生との対話の難しさを思い、学生のさらなる意欲を掻き立たせるように、授業展開を工夫し、今後の講義を行う必要を感じる。

だが一方でIの設問では4.5以外は4点を上回っており、「文学」との科目の性質上、知識伝達というよりも思考プロセスに比重が高いので、受講学生の誰か一人の心に傷跡を残すかのような言葉での語りかけに努めて行きたいと思う。

II での19 4.63 との評価を得た。少しは学生の知らない世界を覗かせることが出来たかもしれないとも思うが、五点を得られるようにさらに一層の工夫と熱意を注ぎ、語りかけることをしたい。

III での21.22.23 4.75 の評価を得ている。オンデマンドであることがこの評価を生んでいるのだろうと思念するが、残りの0.25は何を欠いているからなのか、それを埋めるものは何かを強く意識していきたいと思う。

自由記述に対するコメント

今年度は課題製作をもって出欠を取った。創作活動のかたちで学生に参加を促したことが、少しは興味を引いたようで「文学」に少しの関心を抱いてもらうことが出来たようであり、もっともっと、頭を使って指先にスマホの「授業」を心がけて展開していこうとの思いに駆られた。

非常勤講師 氏名：橋本和彦

対象科目：臨床検査法

### I. 授業の目標・工夫

医療は臨床検査から始まり、検査結果に基づいて疾病の診断を行い、診断に基づいて治療を行うという流れがゴールデンスタンダードである。つまり、臨床検査とは医療の根幹をなす重要な医療行為である。本授業においては臨床検査の意義を理解し、歯科医療に関係の深い一般的な臨床検査項目を中心に、その検査方法と結果の解釈を学ぶことを目標としている。

授業では単に臨床検査項目と検査基準値を覚えさせるだけではなく、まず病理学・口腔病理学の知識を基盤とした疾患概念から解説し、臨床検査の必要性に関する学生の理解を深められるよう工夫している。また画像やイラスト、動画を多く用いて、臨床検査の実際に関する具体的な説明を行うように努めている。

### II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

昨年度の学生から受けた指摘は以下のごとくである。

#### 1：スライドの送るスピードが速い

臨床検査法は多領域にまたがり、その種類も多岐にわたる。検査項目に関連する疾患の総論から検査各論までを説明すると内容が盛沢山になってしまい、結果、授業スピードが速くなってしまった結果の指摘と思われる。授業容量の調整を行いたい。

### III. 学生に期待すること

基礎疾患を持つ患者は増加の一途をたどっている。そのような患者に安全な歯科医療を提供するためには、全身疾患の基礎知識を有し、患者が提示した臨床検査表を読み、客観的かつ正確に患者の状態を把握しなければならない。本授業で得られる知識は、資格取得後の現場において必要なものばかりであり、ぜひ積極的に学習していただきたい。

非常勤講師 氏名：長谷川哲也

対象科目：司法福祉

司法福祉の授業 15 講のうち 9 講を担当しています。

アンケート結果から、質疑応答や、予習復習することなど、受講生がより主体的、積極的に授業を受けられるようさらに工夫する必要があると思いました。

自由記載では、普段あまりなじみのない分野について学べたといった趣旨の感想が複数ありました。司法は、犯罪や私的な紛争等について国家が介入して解決をしていくもので、社会の基本でありながら、普段の生活の中であまり関わる機会は多くないかも知れません。しかし、福祉の専門職として仕事をする場合には、当事者の相談対応や支援をしていく中で司法の領域と関係することは少なくないでしょう。

この授業では、刑事司法の中での福祉的な関与を学びますが、まず基本的な刑事司法の仕組みや実情を知り、その上で、刑事司法における福祉職の仕事を理解するということとなります。このため、内容がどうしても盛りだくさんになってしまい、授業が一方的な情報提供に流れがちでした。実際、アンケートでも 1 回の授業での話題が多すぎるのではないかとの指摘がありました。

今後は、ポイントを絞って情報量を調整し、その分、質疑応答が増えるような工夫をしたいと思います。刑事司法の手続や関係機関等の基本的なところをしっかりと理解し、その上でこの分野での福祉的な関与について考えていきましょう。授業で使用する資料が見やすくわかりやすかったという意見がありましたが、こちらの方もさらに工夫していきたいと思えます。



非常勤講師 氏名:平澤泰子

対象科目:障害者福祉論(講義)、障害者の生活の理解 I (講義)

## I. 授業の目標・工夫など

### 1) 障害者福祉論

本授業の目標は、障害を基礎的に理解し新たな障害者観を形成して障害のある人へ接することができること、また、障害のある人への社会制度やサービスを概ね理解できることであった。そのために、できる限り多くの資料を作成し配付した。資料が多いことによって学生が混乱しないように、自らの体験談や身近な出来事を交えて説明するように工夫した。また、障害者への制度については、復習しながら説明するとともに図表をもって視覚からも入るようにした。

### 2) 障害者の生活の理解 I

本授業の目標は、障害者福祉の諸理念が目指すべき社会の在り様がわかること、合わせてそれに相反する思想の問題点を指摘できること、また、障害を基礎的に理解し新たな障害者観を形成して障害をもつ人へ接することができることであった。そのために、自らの体験談や身近な出来事を交えて説明するように工夫した。また、当事者の声に向き合うようにできる限り多くの記事を配付した。さらに、それぞれの理解や問題点を共有できるよう全員が発表するようにした。

## II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### 1) 障害者福祉論

授業評価アンケートにおける「授業について」の平均点は「4.47」であった。学生の「良かったと思うこと」では「詳しい説明をしてくれた」「制度等について詳しく知ることができた」、「意見や感想」では「話や授業の話がおもしろかった」「ていねいであった」等、概ね良い評価を得ることができた。学生の「改善が必要だと思うこと」では「板書が見えなかった」という意見があった。今後は見えやすい等の配慮をしていきたい。

### 2) 障害者の生活の理解 I

授業評価アンケートにおける「授業について」の平均点は「4.43」であった。学生の「良かったと思うこと」では「たくさんの知識量を蓄えられたと思う」等、概ね良い評価を得ることができた。学生の「改善が必要だと思うこと」では「字が読めなかった」「ちょっとわかりづらい」「実習延長した者への配慮」との記載があった。今後は「丁寧な板書」「わかりやすさ」「実習延長への配慮は学生に不利益のないようにする」等の配慮していきたい。

非常勤講師 氏名：平田創一郎  
対象科目：歯科衛生行政学（講義）

## I あなた自身について

「4 自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」が最も評価が低く、次いで「1 自分は、この授業を受けるにあたりシラバスをよんだ。」が低かった。授業前後における学生の能動的な参加が不足していたと考えられる。このことから、ポストテストのフィードバック後に質問時間を設ける、シラバスにプレテストにつながる情報を明記するといった対応をする。

学科・専攻平均点を下回ったのは、前記2項目に加え、「5 自分は、予習復習(提出課題を除く)をして理解を深める努力をした。」「6 この授業の内容は良く理解できた。」「7 自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。」であった。5については前記と同じ対策で対応する。6、7については、そもそも科目内容自体が臨床系ではないため、臨床を志す学生の興味とは一致しにくい。この科目がいかに臨床を行う上で必要かを、実際の現場をイメージできるように伝えていく。

## II 授業について

最も低かったのは「18 成績評価の方法は適切であった。」であった。科目内容と授業形態が講義のみであることからして、知識以外を評価対象とすることが困難であり、この項目に関してはいかんともしがたい。

全項目で学会・専攻平均点を下回っており、上記の対応を行うことにより改善を図る。

「20 安全についての指導や配重が十分なされていた。(実習科目のみ回答)」は、当科目には当てはまらないため、評価対象から外していただきたい。

## 自由記述について

教科書を使用した講義は、他の大学等でも常に実施している。学生が自ら学修する上ではもっとも効率が良い授業形態であると考えている。この点について良好なコメントが得られたこと、試験成績も良好であったことから、継続する。

令和5年度から教科書が改訂され、私が編集を担当したことから、より一層充実した内容の講義を実施できると考えている。

非常勤講師 氏名：増田京子

対象科目：ソーシャルワーク演習Ⅱ・Ⅲ（増田担当分）

授業評価アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

アンケート結果から、学生の皆さんが、この科目をとおして、よりソーシャルワーカーとしての自分に向き合うことができたことを大変嬉しく思います。少人数のなかで、いかに他者の価値観に触れ、自己理解を深めるのか試行錯誤が続いておりますが、今後も実務家教員として、さまざまな事例を提示しながら、より実践的な授業を展開していきたいと思っております。